

浅野誠

若者の生き方シリーズ 1

若者の人間関係・

大人の若者への対し方

2012年7月中旬

シリーズのはじめに

2004年から始めたホームページ、それを2007年から引き継いだブログ、それらに書きためた記事をテーマ別に編集し、少々書き加えて、ひとまとまりの「読み物」にすることにした。そのテーマは、柔らかいものから硬いものまで多様だ。

柔らかいものは、まずは『南城物語シリーズ』として、2012年7月初めに公開した。硬いものの最初として、今回、『若者の生き方』シリーズを提供する。それほど硬くもないが。

私は、2003年に中京大学を退職したが、それに至る数年間、授業で『若者の生き方創造』にかかわるワークショップ的なものを学生たちと取り組んでいた。他の大学でもおこなったし、あるいは成人対象のワークショップをしたこともある。それらに基づいて、多様な人生ワークショップをつくり、またそれらを集約する小論を書いた。そして、一区切りとして「<生き方>を創る教育」（2004年大月書店）を刊行した。

そうした『歴史』を踏まえて、2004年秋に沖縄に移住し、沖縄の若者たちと再び触れあい、共同作業を展開し始めた。その最初は、2004年1月の琉球大学での集中講義であった。それ以降、沖縄国際大学、沖縄県立看護大学、沖縄リハビリテーション福祉学院、沖縄大学の授業、さらには名桜大学の学生たちとのワークショップを展開した。と同時に、近隣に住み働く若者たちとの交流も大いにしてきた。

そうした経験と、主として本を通して知る全国的世界的な若者動向とをからめながら、私なりの『若者の生き方』論を展開深化させてきた。

「<生き方>を創る教育」を出すころまでは、ストレーター秩序の縮小と、それとのからみで模索する若者たちということが一つの焦点だった。また、沖縄の若者が見せる、1980年代半ばまでとの大きな変化も関心の的であった。だが、それらの探求をさらにバージョンアップする必要をここ数年感じ始めた。今回開始した作業は、それらの模索の集約といえるかもしれない。

大学授業においては、偶然の要素が多いが、ここ数年、なぜか1～2年生の授業ばかり担当しており、高校を出て日が浅い若者との出会いは、これまでにない世界を見せてくれる。また、ここ数年、Uターンとか、移住とかで、近隣に住む若者との出会いも増えてきた。

そうしたなかで、私の視野には、それまでになかった世界がいろいろと飛び込んでくる。そうしたものを踏まえて、私なりの『若者の生き方』論や、提案を数年かけて熟成させられれば、と願っている。その基礎作業として、この作業を位置づけたい。

ここで、『若者の生き方』シリーズの全体構成を紹介しておこう。

- I 人間関係・大人側の若者への対し方・・・今回
- II 学ぶ・文化・世界発見・・・2012年末予定
- III 進路・職業・・・2013年春予定
- IV 人生創造・・・2013年夏予定

目次

はじめに

5

- 子ども若者が学校・家族に囲い込まれ、独自世界を弱める
- 子ども若者の独自世界創造をサポートする
- 家族間協同のなかで、親も子ども若者も共同創造へと進む

1. 人間関係

9

- 学生への社会的スキル・トレーニング
- 人間関係上の貧困と経済上の貧困

1 1. 同世代

11

- 久しぶりの琉球大学授業その1 授業と飲み会
- 若者の「自立」「自分探し」「恋愛」強迫
- 注目 「まったり」と「緊密」の中間
- 移行する際にかかわる集団という視点1 大学・会社などの例
- 新たな生活指導実践・移行する際にかかわる集団という視点2
- 若者の移行支援—移行的コミュニティの可能性
- 若者・子どもの人間関係1 都市と農村・沖縄の人間関係
- 若者・子どもの人間関係2 つながりの同質化と企業社会化
- 若者・子どもの人間関係3 近年の特徴
- 若者・子どもの人間関係4 民主的交わり ソーシャル・スキル

1 2. 結婚と家族形成

25

- 山田昌弘「少子社会日本」(岩波新書2007年)に示唆を受けつつ、<生き方>の変更創造・沖縄について考える
- 生涯未婚率増加報道
- 「チュラサン」アパート 新しい共同生活のありようの創造
- 家族の多様化 非婚化における生活単位のありよう
- 結婚と家族形成 生き方 自由 人間関係

2. 大人の若者への対し方

2 1. 親子関係

3 4

- 「非行」をきっかけにした親子葛藤と人生創造 I ストレーター秩序
- 「非行」をきっかけにした親子葛藤と人生創造 II 親・家族はいつまで子どもの面倒をみるのか
- 「非行」をきっかけにした親子葛藤と人生創造 III 閉鎖から開放へ
- 「非行」をきっかけにした親子葛藤と人生創造 IV ストレーター秩序に代わるもの
- 「非行」をきっかけにした親子葛藤と人生創造 V 人生創造へ
- 人生ユンタク第五回「親子関係」
- 通学時の親による車送迎を減らそう、やめよう
- オープンで豊かな交流のある家
- 教育・子育ては物語創造風に
- 「仲良し親子」の顔をした過剰な相互依存
- 過剰依存の「親子仲良し」状態からの卒業のために
- 「母子（父子）べったり関係の卒業」という難しい課題
- 自信がある強く立派な親が引き起こしやすい子どもの不幸
- 親が、大学生である子どもの「生活のお膳立て」をするのは心配だ
- 親子関係の再編・創造 生活指導学会での論議
- 若者の親との同居・別居

2 2. 異世代間

5 9

- 学生とのズレから、世代間協同へ、さらに人生後半期の生き方創造へ
- 「今時の若いものは・・・」？ 世代間時代間のずれと協同

2 3. 教育費

6 2

- 授業料など納入費用
- 教育費と家計
- 若者の経済的困難と高校
- 大学進学と経済力
- 大学進学をめぐる経済的困難と格差

※ 本文の各タイトルの前にある年月日は、ホームページやブログに掲載した日付である。

本文は、読みやすくするために、掲載当初のものに少しだけの加筆をしたが、基本的には当初の文とそれほどの変わりはない。

はじめに

2012年7月5日

子ども若者が学校・家族に囲い込まれ、独自世界を弱める

全国的にいうと、ここ50年間、若者の生き方は大変化を遂げた。子ども・若者にとって、学校がその時期の最大の存在になり、その後の人生を決定づける重大なものになった。仕事でさえ学校をとおして得るものとなった。そこで標準とされたものを、私は「よりいい高校→よりいい大学→よりいい会社→終身雇用で定年まで勤務、というストレター秩序型人生」と名付けた。学校はその流れを推進する中心的役割を担うものとなった。

また、家族については、教育熱心家族が標準とされるようになったが、親が自ら我が子を教育するのではなく、学校での好成績をえるようにサポートするのが家族の役割となった。

学校と家族のこのありようは、大都市を中心として本土では1960年代から準備され、70年代には確立し、80年代には例外を許さないありようになった。「復帰」後、本土からの強い支配的影響下に置かれた沖縄でも70年代に準備が進行し、80年代半ばから90年代にかけて確立し、90年代後半から00年代には例外を許さない事態になる。

しかし、これらの秩序は90年代半ばから崩れはじめ、「ストレター秩序」で終身雇用正規雇用が保障される人数が制限され始める。沖縄でも、その事態がここ数年間で明瞭になってきた。不正規雇用の増加、格差の拡大がそれを象徴する。

こうして、子ども・若者は、学校、家族に囲いこまれてきた。学校からはずれたありようを求めると、「不登校」「おちこぼれ」などとして対策の対象になる。教育熱心でない家族は、「ニグレクト」として批判されることさえある。かつてのように、地域の子どものことは、めったにしか見られないものとなった。家族以外の地域の大人との付き合いは激減した。あるいは、地域の子どもの遊び仲間も激減し、子どもたちが自ら遊びや企画を作り上げることも激減し、親を中心とする大人たちが用意したものに乗るものとなって行く。地域遊び仲間に代わって、塾、スポ少などが盛んになるのだ。

私が住んでいる沖縄の田舎では、全国的に見れば珍しいかもしれないが、小学生ぐらいの子どもたちが、公民館前広場、家々の庭などで群れて遊んでいる風景が見られる。しかしそんな中で、一緒にいながらもゲーム機に夢中になっている子どももいるし、中学生ともなれば、地域から姿が見えなくなる。放課後は、部活と塾の世界になるからだ。生徒たちが自ら結成し運営するはずの学校の部活も、学校教師たちが用意し管理する活動がほとんどを占める。

こうして、子どもたち若者たち自身が仲間関係をつくるのは、クラスとか部活などで出会い、仲良くなった数人だけが、クラスや部活の裏でというか、あるいはちょっと外れたところで、というか、そういう場で、ということが多い。さらにそういう仲間も作らず、「帰宅部」になる若者もいる。大学生にも、大学授業と自宅との往復だけという高校時代からの「帰宅部」習慣が続いている例を結構見かける。

また、大学入学後、同じ高校出身者どうしで固まって仲間をつくる例が目立つ。同じ高校から 1~2 名しか入学していない学生が寂しい思いをしている例もある。

そうした数人の仲間関係のなかでは、「気遣い」が大切で、それが下手なものは「KY」と言われてしまう。討論をすごく重視する私の授業で、発言で突出して、KY だといわれてしまう空気さえ出て来ることがある。とくに、同年齢が圧倒的に多いクラスではそうなりがちだ。社会人入学生がそんな空気を突破してくれることがある。

2012年7月10日

子ども若者の独自世界創造をサポートする

では、どうしていけばよいのか。

近代以前の時代にあっては、宿命的に決まっていた人間関係、そのなかでは習慣化した人間関係の秩序を守ることが、人生を保障するものであった。そうしたありようとは異なって、近代・現代では、一人一人が、人間関係を選びつつ、選んだ人間関係の中で、関係のありようをも創造していくことを通して、自らの人生を創造していくものとなった。

それは、自らの人生と人間関係を自ら選び創造できるという可能性に満ちたものであったと同時に、新しい課題であるために、困難を伴うものだった。

たとえば、結婚も、自ら相手を探し出し、家族のあり方も、二人で共同創造するものとなった。友人関係もそうした類いのものとなった。現在の若者の親の世代は、そうしたありようの先駆者であり、試行錯誤しながらも模索創造してきた。新たな人間関係の創造はなかなか難しいので、既存のクラス、同郷、会社といった既存の組織の中で、それに合わせたり、批判的に組み換え創造したりして、模索創造してきたのだ。そうした親の世代のありようを、二代目として模索しているのが、現在の人生前半期の人々だ。現在の若者は、2代目ないしは3代目というところだろうか。

親の世代は、自ら創造してきたが、前時代のありようを引きづっていた。会社や部活では、自主的に選択加入したという面を持ちつつも、前時代の家族主義的なありようや、強い上下関係などを残していた。

そこで、現在の若者たちは、人間関係を渴望しながらも、強い縛りのものを避け、付かず離れずの関係をもったり、あるいはいったんつながった関係を維持するために「気遣い」を過度に重視する。また、つながりを作るためにマスメディア文化を活用したりするが、それは皆に合わせるよりも、「個性重視」で、「自分なり」のものを試み、「縛り」の強い部活ではなく、「縛り」は弱い、自己実現しやすい、自分たちなりに組織・関係を再編しやすいサークルめいたものに、集まりやすいのは、その表れだろう。

そうした試行錯誤のなかで、クラスメイトといった、偶然の出会いから始まった関係のなかで、趣味・関心事・課題などを共有する者同士の人間関係へと絞ったり、広げたり、共同の取り組みを始めたり、再編したりしながら、30才前後ぐらいまでの旅を展開し、ある程度の人生と人間関係の形を示すようになるのが、30代だというのが、現状の平均的な形のようなものである。

そうした彼らの営みをサポートすることが、年長世代の課題として、あるいは、若者世代をサポートする業務にかかわる人々の課題となっている。

大学の授業でも、人間関係が比較的乏しい学生にとっては、たまたま隣に座り、討論し共同作業をすることになった関係をきっかけに友達作りが始まる例は多い。私の大学授業では、そういう相互関係を作る機会をたくさん作る事を意識的に進めている。そのことを通して、関係・世の中の発見創造へと旅立っていくことを期待してのことである。

2012年7月15日

家族間協同のなかで、親も子ども若者も共同創造へと進む

先に述べた二代目・三代目の親たちの中で、二人で新たな家族を形成したものの、二人の関係を上手く展開するのに苦労する例がしばしばある。そうではなく、困難に出会った際、外に開かれた関係を築き、第三者のサポートをえながら困難を突破するだけでなく、新たな家族内外関係を豊かに築く例も多い。保育所・学童クラブ等を通しての、親間の交流協同がその契機になることはよく見かける。

そうした関係を築けずに、カップル関係を維持発展できなくなることもある。カップル関係は、自由な選択創造であるだけに、それはそれとして正当である。だが、それはカップルだけのことにとどまらないことを見失ってはならない。とくに子どもができれば、その子どもをふくめた新たな関係ができる。子どもにとって重要なのは、子どもを保護し、子ども自身が豊かな関係を築いていくような条件があることである。

まずい例として、片方の親と子どもとが一心同体になって、というか、片方の親が子どもを「完全支配下」において、子どもの自立を促進しないことがある。それは親自身が自立しないことでもある。1990年代に、そうした親子関係を「共依存」という言葉で指摘されたことがある。それはひとり親家庭に限らない。片方の親と子どもとがそういう関係に陥り、もう片方の親が存在感をなくす例も多い。

大切なことは、新たに作られたカップルが、各々の親などの親族関係、そして出生する子ども、さらに親族外とつながって、自らの家族だけでなく、社会を共同創造する方向性をもって動いていくことである。そのためには、家族間協同関係構築を、家族形成の不可欠な要素として位置づけることが必要である。

こういう変化流動性に富んだものとして家族をとらえたい。だから家族にも時期変化、大きく言うと時代変化がつくられる。家族メンバー一人一人の歴史だけでなく、家族関係の歴史が形成されるのだ。

若者は、それまで生活してきた家族から巣立って独立しつつ、自ら新たな家族を創設するという歴史過程の中を生きる。それだけにやりがいがあると同時に困難が伴う歴史時期である。

本書の諸論は、以上述べてきた志向性の中で書かれている。

読者の皆さんの創造的な営みに期待すると同時に、私の諸論へのコメントをいただけたら幸いである。

1. 人間関係

2012年2月17日

学生への社会的スキル・トレーニング

宮本みち子編著「人口減少社会のライフスタイル」(放送大学教育振興会 2011年)をもとに

次の文は、私が大学生対象の授業でしているそのものを述べている。だが、私のような授業は、まだ少なすぎる。なお、この引用文では、「個別対応」に比重がかかっているが、大学での「相談室」などでも、グループ対象に社会的スキル・トレーニングをする例が増えている。本格的な教育として授業を含めて展開する必要があるのではないか。実際、沖縄県立看護大学など、そうした科目を設定する大学も登場してきている。

「イギリスの青年心理学者、ジョン・コールマン (Coleman, J.) は、現代の青年期の大きな問題は、現代社会で生活するために必要な対人的・社会的スキルを十分早くに学ぶことができていないことであると指摘し、青少年、若者のための新たな〈学び〉の社会を打ち建てるのが大きな課題になっているという。大人が教師や指導者としてではなく、役割モデルや相談相手として若者と関わるが必要となっている (コールマン, J./ヘンドリー, L.)。」 p141

「若者が、学校と家庭と会社のトライアングルによって一人前になってきた日本では、学校と会社から外れてしまった者への援助の仕組みはないに等しい。これまでの日本や社会システムは、変化しつつある「成人期への移行」に合わなくなっている。

新たに必要なものは何かを考えると、次の7点を挙げることができる、①生活設計の力を養う教育、②仕事場での体験と学校教育を結びつける多様な機会、③学校教育から仕事へつながる整備された経路、④職業社会に定着するための職業訓練や職業指導、⑤失業や不安定雇用など危機に瀕する若者のためのセーフティーネットとして、社会保障の整備、⑥労働に限らず幅広い情報提供と相談サービス、⑦大人になるためのプロセスを支える組織的な仕組みの確立と、やり直しのきく柔軟な社会システムづくりなどである。」 P140~2

「学校と会社から外れてしまった者への援助の仕組み」の問題は、2011年末に生活指導学会でも議論し、本書の数ページ後にも触れる「移行期集団」の問題である。

2009年11月24日

人間関係上の貧困と経済上の貧困

湯浅誠・富樫匡孝・上間陽子・仁平典宏編著『若者と貧困』（明石書店 2009年）をもとに

経済上の貧困と人間関係上の貧困をセットにしてとらえる見方が、ルポルタージュなど所々で登場してくる点に、私は強い関心を持つ。

ルポルタージュなどでは、「貧困」状態に置かれた若者の場合、経済上の貧困と人間関係上の貧困が併存していることが示される。また、そこから抜け出すこともまた、両者が並行していることが示される。

若者が孤立するとき、日常生活が、孤立的職場と孤立的宿所との往復、それに付け加えるとすれば、コンビニでの食品購入など、金銭に依存した生活維持となりやすい。彼らの私的空間は、狭い宿所と商品提供店に限定されてくる。そこに人間関係的なものが入り込む余地がどんどん縮小されていく。

食事飲酒という、身近な例で考えてみよう。こんな例はさびしい。一人で、居所で食べ飲む。食堂酒販売店で、一人食べ飲む。

食堂居酒屋で、数人で食べ飲むのはいいと思うが、経済的貧困の場合はなかなかできない。とすれば、共同の場所で、何人かで食べ飲むとか、開放的な個人宅で、何人かで食べ飲むというのがあってよいのではないか。本書の中には、ユニオンで皆一緒に食べる例がでてくる。誰かが作るのだが、さらに、食材を共同で手に入れ、作るということになれば、なおいい。何人か以上で共同で作って食べ飲むということが、人間関係の豊かさを生むし、参加者個人の豊かさを生み出すのだ。こうした人間関係の豊かさは、経済的貧困を補うだけでなく、経済的豊かさを築くきっかけさえ作り出していく。

経済が数値化しやすいのに対して、人間関係は数値化しにくい。それだけに、貧困問題の対策を考える際、あるいは研究の際にも扱いにくいだろう。しかし、この両者をからめて検討することは不可欠だ。

私自身を含めて私が住んでいる周辺は、金銭額だけで言うと、東京の「貧困」ライン以下であるかもしれない。しかし、人間関係の豊かさがあるためか、「貧困」の雰囲気は希薄だ。公民館やどなたかの家でみんなで飲食することはよくある。

1 1. 同世代

2004年1月19日

久しぶりの琉球大学授業その1 授業と飲み会

2004年1月、14年ぶりに琉球大学で授業をした。「生活指導」と「子ども文化特論I」を2週間にわたって交互に行った。双方の授業とも、最後は飲み会で終わった。

私が在職していた1980年代の琉球大学では、飲み会・コンパなどは日常茶飯事であった。授業を合宿でおこなったり、いろいろな行事をとりこんだりするのは、私の授業の通例であった。1990年、中京大学に赴任して、そうした呼びかけをしたら、学生たちに「シラケ」られて、授業でそうした企画があるなどは、いくつかのゼミを除けば信じられないというものであった。

考えてみれば、それが日本の大学の通例であろう。そして、今回、琉球大学でもその呼びかけをしたら、学生たちはびっくり顔をした。そういう慣習が消滅してきたようである。自動車通学が当たり前になったこともあるだろうが、それは中心的理由ではない。

学生たち相互のつきあいが著しく減少しているようだ。教員たちも以前と比べようもないほど忙しく、学生たちにそうした呼びかけをする余裕が減ったのだろうか。私の飲み会のよびかけに、最初は躊躇していた学生たちだったが、都合のつく学生たちがかなり参加してきた。授業でのそうした企画があることにうれしそうに参加してきたのだ。そして、いろいろと語り合った。

授業をはじめとする教育実践はストーリーを、できればドラマ性の高いストーリーをつくることだと思う。そうしたドラマが短期間ではあったが、多少は生まれた授業になったのではないかと思う。

2006年7月2日

若者の「自立」「自分探し」「恋愛」強迫

木曜日の沖縄大学の加藤ゼミ参加と、土曜日の生活指導理論研究会で、気づいたことである。若者たちの多くが、「自立」「自分探し」「恋愛」についての強い強迫観念をもっているということである。それらは、かなり抽象性の強いものとして存在し、実体がとらえにくいものであり、それらが実現しているかどうか判断しにくいものである。

1960年代にも「自立」「自分探し」「恋愛」といったものは、若者にとって大きなテーマであったが、それらは具体性を帯びていた。親からの経済的自立、農業ではなく被雇用者としての仕事探し、社会的変化政治的対立構図のなかでの自分の位置確立、見合いではなく「愛」にもとづく結婚といった風に、よく見える形で存在した。だが、1980年代以降、それらが急速に抽象化した。ちょうどそのころ、「自立」「自分探し」などといった言葉が頻繁に使用されるようになるとともに、若者の身近に存在する言葉となった。そして、教育実践もそうした用語を頻用したのである。親たちも、それらの用語を使って、子どもたちに期待し迫っていった。その際、その「自立」「自分探し」「恋愛」などは、子ども・若者が自由に自分の力で構築できるというタテマエでありながら、大人世代は標準を所有して、その標準に沿って子ども・若者が「自立」「自分探し」をすることを求めている。ダブルバインドである。「愛」についても、「愛」にもとづいて結婚し、核家族を築き、平等な夫婦関係を構成し、かれらの子どもたちが「自立の根拠地」になるような教育家族をつくりなさい、という「標準」が形成された。これらは、子ども・若者にとって、抽象性の強いものであり、かつまた「標準」が潜んでいるものであった。そのため、多様な「自立」「自分探し」「恋愛」が目に見える形で存在するのではなく、「標準」の範囲内で設定されるものであった。しかも、その「標準」の枠は、数字によって序列化されがちであった。こうしたものが「ストレーター秩序」である。「ストレーター秩序」のなかでより上位に位置することが「自立」「自分探し」であり、すばらしい「恋愛」であり、「ストレーター秩序」からはずれることは、「自立」「自分探し」から脱落・失敗することであった。だから「フリーター」「ニート」は「自立」「自分探し」のなかの選択肢には該当しないのである。

社会的リアリティの稀薄さは、これらへのアプローチを「内面化」「心理化」しやすくする。個人の内側を志向した「自立」「自分探し」であるとともに、また「自分」という強力な「固まり」があり、かつ必要だという錯覚をも生み出し、「自己」というものが、社会的な関係のなかでつくられるものであり、そうした社会的な関係が、「自己」の実体を形成するのだ、という認識は稀薄であった。

そうしたなかで比較的わかりやすいものが、競争における位置での確認であるが、偏差値による受験勉強、競技成績にもとづくスポーツ、コンクールにおける音楽などがそうした色彩を濃厚にもった。そうしたなかで相対的に高い位置にあることが、「自立」「自分探し」に成功しているという錯覚を与えた。その錯覚から目覚めるのは、一定年数たってからであり、「強い」ものほど遅れるという傾向さえ生んだ。プロ志向のスポーツ選手たちが、そのことに気づくのは20歳前後である。そうした世界を支える一つの社会的基盤はマスメディアにあったが、マスメディアはそれらの競争的地位での上位を確保できないものに対しても、きわめてアクセスしやすい一定の支えを提供した。そしてそれが、社会的リアリティよりも、若者にとってははるかに親和的な事態をつくりだしたのである。

こうした構図が80年代に広がり、90、00年代には一般的なものとされた。そして、子ども・若者の発達も、そうした秩序のなかで想定されることが一般化したのである。

私も、80年代前半までの論文などでは、こうしたことに全くの無自覚であっただけでなく、むしろ強化するものでさえあった。当時の私としては、それを1960年代的イメージで語っていたのである。さらに80年代後半以降も、こうしたことを意識化していくのにかなり手間取った。

私も含めて、教育実践をリードしようとする人々のなかで、こうした状況への疑いの目が成立し広がっていくのは、「自己責任」論と登場・広がり、「自己啓発セミナー」なるものの隆盛などであり、1990年代以降のこととなる。しかしながら、社会的動向の主流は、そのことに気づいていない状況にあるどころか、むしろ主導的な手段としているのである。

2007年5月29日

注目 「まったり」と「緊密」の間

「小学生から大学生までの若者が、他人と関わりたいという気持ちと、他人に干渉されずに「まったり」としていたいという中間を求めている」という筒井愛知さんの指摘に出会った。この指摘が掲載されている、子どもの参画情報センター編『居場所づくりと社会つながり』（萌文社2004年）という書籍も大変注目されるが、その全体については機会を改めることにする。

もう少し筒井さんの指摘を紹介しよう。「内部では干渉し過ぎない緩やかだが無視できるほどではないつながりが保障されていて、なおかつ外部とは希望すればつながりが持てるが、隠れていようと思えばそれも保障されているということである」

私はこれと似ているが、異なったアプローチで、ここ20年間発言しつづけてきた。人々には、宿命的に所属する組織と、自分の希望で自由に加入退会結成解散できる組織の双方にかかわることが大切だと。

しかし、子どもや若者たちだけでなく、大人にあっても、そうした多様さ・柔軟さをもつ組織はとても少ない。だから、人々は、「しょうがないからつきあう組織」と「自分たちだけでウチウチの楽しむ組織」に使い分けるなどということが多く。しかしその使い分けに慣れていないし、多様な組織体験が少ないので、なかなかうまくいかない。とくに近年増加してきている後者の組織がうまくいかず、結果的にマスメディア・商品に主導されるものになったり、あるいはごく個人的なもので、組織とはいえないようなものが多い。子どもも大人も自由に組織にかかわる体験をたくさんもっていききたい。

私のワークショップもそうした性格をもっているといえよう。

2010年12月30日

移行する際にかかわる集団という視点1 大学・会社などの例

12月19日の生活指導学会の研究会と理事会の討論で、興味深い視点が登場してきた。それは、何かに属していたのが終了し、別の何かに移行して属するようになった時、つまり移行期に、その人を支える集団に注目して考えるということだ。たとえば、高校を卒業し、大学に入学する時期に、その彼女・彼が身近にかかわる組織に注目するということだ。

改めて、その視点で見ると、移行にともなう実に色々な集団がある。移行の際に、個人は移行に伴う不安定状態に陥りやすく、その不安定さを支える集団の有無、その集団の性格によって、新たに属することになったものへの適応・対応に大きな影響を及ぼす。さらにそれにとどまらず、その集団が、属した・属する新旧のものへの強い影響をもたらすことがある。時には、オールタナティブなものを準備する可能性さえある。逆に、属していた・属するものが集団に強い影響を及ぼすことはいうまでもない。

いくつか例をあげて考えよう。

1) 大学一年生が、入学当初に新たな人間関係をつくる際である。大学の特徴、とくに大学側がどういう配慮・世話をどれだけ行かかが強い影響を与える。新入生対象の合宿オリエンテーションを、小規模グループづくりを含めて行い、上級生がかなりの世話をする大学とそうでない大学とでは大きく異なる。付属校からの進学が多い大学では、付属校からでない学生がとまどいを感じたり、付属校出身者に「対抗」的になったりする。付属校出身者は、高校までの関係を継承する（ひきずる）事が多い。面識がある人がいないために孤立しがちな学生への声かけのアプローチを用意している大学とそうでない大学との差も大きい。

この過程の持ち方が、大学側の教育への姿勢を反映するとともに、この時期に起きる問題への対処を通して、教育活動への新たな取り組みの契機になることがある。

2) 新入社員を受け入れた職場から、早期に離脱する若者をめぐる集団。かつては新入社員にたいして、職場側が、彼女・彼を囲む人間関係をつくり、職場に早期に落ち着くことに腐心することが広くみられたが、最近の事情は随分変化してきた。1年以内に半数以上が退職することを前提に大量採用し、新入社員相互間のサバイバル競争を強いる会社の話を聞いたことがあるが、そうした類いが増えてきているようだ。新入社員教育経費をおさえ、即戦力を求める会社でそうした傾向が強くなる。

そうした会社では、オフィシャルでないところで、新入社員がどのような人間関係をつくるか、つくらないかが『残留』にむけて大変重要になる。競争的環境のもとで退職した場合、1～2ヶ月は自宅引きこもり状態になる例が多いという。

かつて多くの会社は、「丸抱え」に近い状態で、新入社員を迎えたが、その逆の事態が続出している。社員も、同僚として支え合う関係が弱くなっている。人間関係下手なものが耐えられず退職し、退職後も人間関係づくりに向かえなくなるのだ。

3) 自ら友だちづくりとか組織（アソシエーション）づくりとかに向かうことに慣れない10代後半の場合、構成メンバーを自ら選んだわけではなく、偶然に集められたという要素が濃い関係を少しずつ自分たちなりのものにしなから、友だち関係をつくる例が多そうだ。たとえば高校時代のクラスメイトである。

また、全国各地にある沖縄県人会のメンバーが、沖縄出身者というだけで、人間関係が薄い若者のサポートを

してきたのもそうした例であろう。県人会とまでいなくても、同郷の知人がサポートする例は日常的に多い。そうしたことを見つけつなぐ役割を取るコーディネーター的な人の存在は大きい。県人会にはそうした人が多くいるということであろう。

2010年12月31日

新たな生活指導実践・・移行する際にかかわる集団という視点2

前回の最後に述べたサポート・コーディネイトする人が、生活指導学会で発表されるレポートにしばしば登場してくる。

移行期にあつて困難に陥る人にたいして、移行前、移行後どちらかに適応・順応するよう、その当事者個人をサポートするのが業務だとされる専門家が、そういう個人サポートではなく、また前後のどちらかへの適応・順応ではなく、当事者たちがつくる組織そのものを存在意義のあるものとして育てていく、そして当事者たちが相互にサポートしあい、コーディネイトしあつて、その組織を維持発展させるというストーリーを描く実践がいろいろなところで見られるようになってきた。

例をあげよう。

- 1) 児童養護施設を「終了した」が、居場所がなく不安定な人たちが集う場をつくる例。「ひなたぼっこ」は有名である。ブログでも、そうしたサイトに出会ったことがある。
- 2) 前回書いた友達がいない大学新入生にたいして相談室がつながりをつくるきっかけを用意し、そこでできたグループを継続するようサポートする。
- 3) アルコール依存症患者に退院後に自助グループに参加するよう呼びかけ、当事者同士で維持していくようサポートする。
- 4) 失業中でジョブカフェ等に来訪した若者たちが職を探すのをサポートするだけでなく、当事者同士のグループ会合への参加を呼び掛け、つながりを発展させる。
- 5) 福祉事務所職員が、生活保護世帯の中学3年生の学習会を組織し、生徒相互間のつながりを発展させていく。

こうした事例は、数えられないくらい多い。そうしたことに携わる専門家の業務は、個々のケースの解決を担当することだが、それを越えて、当事者間のつながりをつくり、当事者たち自身の問題解決および関係創造への意欲と力量を高める方向へと動いていく。多くは職務範囲を超えるが、取り組みのストーリーがそうさせ、実際には、その効果は、本来の業務への決定的と言えるほどのプラスをもたらすのだ。そして、本来の業務のありようの改革へともつながっていく。

あえていおう。オールタナティブともいえるそうした営みの方が、実践の新たな方向を示唆提案し、旧来の取り組みのありようの改革につながっていくのだ。「例外」を「フツー」に戻す業務というのではなく、「例外」の方に、新たなよりよき「フツー」を生み出す可能性さえはらんでいる事が結構あるのだ。

こうした集団は、強力なリーダーがいて、しっかりした理念と決まりをもち、主張性が強い組織であることは稀だ。縛りが弱いヨコ型のもので、「いつ消えるかもしれない」といった感じでさえある。アソシエーションといえばアソシエーションなのだが、しっかりしたものではなく、出会ったものがしばし仲良くつきあう、といった感覚である。とはいえ、当事者にとっては、それだけに大切な「出会い」「一期一会」的な存在である。また、生き方・人生ともかかわりがあることが多い。そうした集団をサポート、コーディネイトする専門家自身も、そこから自らの生き方・人生へのヒントを得ることさえあろう。

こうした集団のありようは、時代状況を反映しているのかもしれない。検討研究の価値がある。1960年代—1980年代後半以降—現在、と並べてみて考えると何かヒントが得られそうだ。

2011年10月21日

若者の移行支援—移行的コミュニティの可能性

2011年生活指導指学会での討論を受けて

タイトルは、最終日の最後の分科会である課題研究Cのテーマだ。

以前なら、大多数の若者は学校→職場という移行を、安定的な所属組織をもつと言う意味でそれなりの[成功]を収めてきた。しかし、近年ではそうではない。そうした安定的な移行を送れる若者の方が少数派になりつつある。就職難、非正規雇用の増大などが、直接的な要因である。そのなか、「居場所」をもたない若者、「不安定な居場所」しかもてない若者が増大している。

とはいえ、何らかの形で「居場所」を持たないわけにはいかない。そこに、生活指導実践が大規模に生まれる。当日は、「ひきこもり支援」「ホームレス支援」という事例報告があったが、人口比で言うと、現実はどうなっているのだろうか。学校→正規雇用と言う流れで安定的組織をもつ若者が、仮に5割だとすると、それ以外の若者の、主たる「居場所」はどこになっており、そこでの援助機能はどう果たされているのだろうか。

「ひきこもり支援」「ホームレス支援」といった組織がかかわる事例は、例外的存在である実情があり、実際は、高校、大学、専門学校、非正規職場、家庭、若者グループといったものが、意識的という形ではないとしても、その役割を果たしている。

たとえば、大学での初年次教育などは、そういう機能を果たす面をもっている。しかし、ほとんどの担当者は、そのことに自覚的ではない。大学教育についていけない新入生対策という意識が前面にでる。中退可能性をはらんだ高校生への取り組みもそうである。熱心な教師の「個人的な」取り組みは広く見られるが、学校としての取り組みをしている例は多くない。さらに、就職後短期間に離職して、職場を転々としている若者に対して、受け入れる職場には、その意識は無いに等しい。

そうした中で、「自己責任」という形での、当人に問題解決を求める発想が幅を利かせている。今、学校や職場には、そうした課題を意識化した対応が求められている。私の現在の関心と実践の一つは、そうしたことに向けられている。

2009年7月13日

若者・子どもの人間関係1 都市と農村・沖縄の人間関係

7月12日の沖縄子ども研究会での中西新太郎講演に触発されて考えたこと、当日促されて発言したことを、再確認／深化する意味もこめて書く。

子ども・若者の人間関係の解体・孤立化の進行をどう見るのかが一つのテーマである。中西さんが出した例は、東京・横浜などの大都市圏を中心とすることではあるが、沖縄にも共通する面を持つ。と同時に、異なる面もある。そのあたりは、以前から言われていることではあるが、そのことを中心に少し綴ってみよう。

今日の子ども・若者分析においては、都市型生活をほぼ前提にしている。農村にあっても、都市型生活が濃厚になっていることを前提にもしている。

と同時に、留意しておかなくてはならないことは、農村回帰的発想が増大していることである。そして、農村的生き方が、やや牧歌的なイメージで語られ、「幻想」性さえ帯びて語られることにも留意しなくてはならない。「地球にやさしい」をはじめとして、いろいろな「やさしさ」希求には、しばしばそうした傾向がみられる。そして、都市・農村の双方をふくめて、沖縄全体を、農村的な「やさしさ」があるものとみたとて、考える傾向さえみられる。

こうしたことは、とくに、人間関係についていわれる。それは、かなり幻想的に美化された「共同体的人間関係」であることが結構ある。

なかには、都市的「人間関係の問題状況」を抜けでられるものとしてイメージされることもある。だから、沖縄への移住者のなかには、人付き合いを避ける人がいる。私は、そういう方々に対して、沖縄、ないしは沖縄の自然を搾取・収奪していないか、問うてほしいと語ってきた。

そして、農村・沖縄の人間関係について、その農村・沖縄に住んでいる人自身はその良さに気づいていず、外から来た人がその良さを指摘するといわれる。だが、何年か、農村・沖縄に住むと「あら」が見えてくるともいわれる。

また、農村、そして沖縄にもともと住んでいた人で、そこでの人間関係に距離を置き、そのわずらわしさから逃れて、「地方都市」、那覇・浦添・コザに移住する人々も多い。その場合、旧来の農村的人間関係を多少薄めた形で人間関係を残す人、都市的関係を積極的に築く人、人間関係の束縛からのがれて、希薄さ、孤立のなかで生きる、などなど多様である。

以上、農村・沖縄における人間関係をめぐって、やや厳しい見方が必要だという書き方をしたが、それでもなお、というか、それだからなお、というか、農村・沖縄における人間関係の肯定的のところは何なのか、という問いを考える上で、必要な留意点をまずは書いた。

2009年7月16日

若者・子どもの人間関係2 つながりの同質化と企業社会化

こうした都市と農村をめぐって、子ども・若者の場合、成人以上に都市志向性が強いといわれる。

※ 北海道で、隣家まで1キロ以上もあるところから、大学進学で沖縄にきた若者が、那覇は大都会だ、と語っていたが、沖縄にはそういう顔があることも忘れてはならない。

しかし、農村と都市という区分では、あまりにも大ざっぱすぎるかもしれない。農村と都市とでは、あらわれ方が異なるにしても、近年の動向をとらえるうえでは、どれだけ企業社会化しているか、というとらえの方が有効かもしれない。

でも、今の日本では、「こんな言い方は古い」といわれるかもしれない。しかし、沖縄では実感がともなう。商品購入中心の生活スタイル、高校・大学進学から企業就職の流れ、点数・偏差値の子ども・若者への支配力が徹底していくなど、他府県では1960年代から1970年代に確立した動向が、沖縄では1970年代から1980年代に確立していく。そして、その秩序が、子ども・若者たちの人間関係に深く浸透するとともに、今日に連なる形での、いじめ・不登校といった問題が日常化するの、他府県においては1980年代後半以降だが、沖縄では、(推理段階だが)90年代半ば以降だろう。

※ これらのことを、沖縄における時間的な「遅れ」とだけ把握することはできない。沖縄における企業社会的あらわれの特徴も検討しなくてはならない。それにしても、企業社会化という視点からの、沖縄の子ども・若者問題の検討がこれまで少なかったことを問題にしなくてはならない。

それらは、もう一つ、マスメディア文化、サブカルチャ文化、インターネット・ケータイ文化などの浸透のありようが重要な指標となっていくことと並行している。

こうした変化は、子ども・若者たちの、それまでの地縁、血縁的つながりの比重を低め、「自由」なつながりを築く可能性を高める。たとえば、高校の通学区域の拡大は、地縁的比重を低める。また、本土進学・就職の拡大は、人間関係を大胆に広める。

だが、それは、地縁的つながりが持つ多様性からは切り離されることにもなる。そして、重要なことは、新たなつながりを作るきっかけに、テスト成績が近いということに象徴される同質傾向を強めることに結果する。一つの高校のなかに、多様なタイプの生徒が共在するのではなく、あちこちから集まるが、「点数」が近く、文化的に近い生徒が集まることになる。

そうした変化は、子ども・若者の築く人間関係に、同質性という契機を強める。そのため、ちょっとした違いがいじめのきっかけになり、その違いをおさえる力学が働いたりする。

たとえば、テレビ番組についての共通話題にのれるかどうか重大な意味を持ったりする。先日ある大学の昼休みの食堂で、何十人もいる学生たちのほぼ全員が、テレビの「笑っていいとも」を見ていて、そろって笑うなどの反応を示している場面に出会った。テレビを見ていない学生、別の会話をしている学生がもう少しいてもいいんじゃないかと思うのだが。

こうした同質性を生み出すのに、偏差値的な文化が重要な役割を果たすのが、日本の企業社会の特質だと思うのだが、それが沖縄の子ども・若者の世界でも決定的になってきているようだ。1990年代、愛知の学生たちを教えていて出会った事態と同じ事態が、今日の沖縄学生たちのなかにも出現しているのだ。

2009年7月20日

若者・子どもの人間関係3 近年の特徴

今日の同質性には、生活感が弱い。あるいは、巨大なシステムというべきものによって作られる、という感じが強い。自ら作り出したというよりも、システムが用意する同質なもののなかで、そうなってしまう、という感じである。

そのためか、それらを介しての人間関係は、ヴァーチャル的色彩をも帯びる。マスメディアが用意するものをもとにして作り出す人間関係には、仮想の短時間の人間関係的色彩が強いものも多い。それらは、「出会い系サイト」のように、セーフティネットをやぶって、子ども・若者の世界に入りこみ、さまざまな問題を起こすこともある。生活感が希薄なために、現実世界での友達関係づくりに未熟なかれらが、そうしたことにアクセスしやすくさせるといふ面をもつ。こうした事情は大都市圏ではすでに一般的なものだろうが、そうした状況と距離があると思われそうな沖縄でもそうした傾向が強まっている。

以上のべてきた事態にくわえて、構造改革、格差社会、貧困といった問題が、子ども・若者の人間関係に影響を与えていることに注目しているのが、中西講演の一つの特徴である。こうした視点から沖縄を見た場合どうなるだろうか。その前提としての企業社会についての検討そのものが希薄なので、これまで長々とそれについて論じてきたのだが。

これらの問題は、沖縄内部の問題というよりは、他府県、とくに大都市圏と沖縄という関係のなかで見えやすい点に注目したい。たとえば、「派遣切り」で沖縄にもどってきた人は多い。また、企業での過剰ストレスなどの働き方に見切りをつけて、帰郷する例も多い。沖縄で仕事が見つかるというわけではない。ひとまず沖縄にもどってきた、というわけだ。その点にかかわって、求人倍率が他府県と比べてもかなり低い沖縄では、私の近辺でのハローワークの活用比がかなり低いが、統計的にはどうなっているだろうか、にも関心が持たれる。

また、もともと他府県出身であるが、沖縄に愛着を感じて、沖縄にくる人たちもずいぶん多いのも近年の特徴のようだ。

また、沖縄でも、企業社会型の働き過ぎ、職場内外の競争的關係のなかでのストレス過剰、そこから来る精神疾患の増大などが目につく。なお、こうした事例が教職員のなかにも目立つのも一つの特性かもしれない。このあたりは最近のことであり、統計データによって、というよりも、私自身の近辺の事例をもとにしたものだ。

こうした事例を見るとき、それまでの自分の生き方の単純な延長線上で再挑戦するという色彩よりも、それまでのありようの変更を模索しながら、というものをもって、新挑戦するという色彩が強い点に、特徴を見出したい、というのが私のアプローチだ。だから若者の個人的社会的な動向に強い関心をもつのだ。2年前にホームページ上ではじめた小説風若者物語は、繁忙のため中断しているが、再開を検討しなくてはと思っている。

たとえば、講演のなかで、中西氏は、多くの若者が20代後半で、何らかの形で落ち着き先を見出しているという話をしていたが、沖縄ではもう少し幅が広く30代になる例が多そうだ。また、起業系も多い。とくに女性の場合、そうであり、私周辺では「癒し系」関連の仕事が多い。

こうしたことをどう考えたらいいだろうか。

2009年7月28日

若者・子どもの人間関係4 民主的交わり ソーシャル・スキル

今回は、友達づくりの基盤としての、コミュニティとアソシエーションという話からスタートする。

私の「<生き方>を創る教育」(大月書店 2004年)でも触れたが、人々がつくる人間関係の基盤には、本人が選択したわけではなく、近隣・血縁・同級生といった、すでに存在している、いわば「与えられたもの」がまずある。それをここではコミュニティとよんでおこう。コミュニティという言葉には、多様な使用方法があるが、ここでは、こうした意味で使う。「共同体」と呼ばれるものでもある。

そうしたものから、友達づくりがスタートすることが多い。このブログでも何度か紹介した、都立大学の乾彰夫さんの研究グループの、東京の高校卒業後の動向調査で「地元つながり」の強さが示されているが、それなどもコミュニティ的世界が基盤となっている。

社会が、移動の自由・職業選択の自由などをふくんで展開するなかで、既存のコミュニティとは異なる、新たな出会いの比重が高まってくると、多様な出会いのなかから選択創造して、友人関係を含む、より濃厚な関係を創る。それを、私はアソシエーション的な関係と呼んできた。

そのアソシエーション的な関係を築くためには、コミュニティ的な関係とは異なる、一定のルールが必要となる。そして、そのルールも、アソシエーション・メンバーたちによって形成変更されていく。また、このアソシエーション的な関係には、解散・退会があるのも特徴だ。

その関係でうまくやっていくためには、一定の技術(スキル)が必要だ。1970年代後半に城丸章夫さんが提起した「民主的交わり」には、その要素が多分に含まれている。コミュニティ的なものからアソシエーション的なものへの比重の移行が、かなり以前から展開した欧米社会は、このスキルの蓄積がかなり存在する。とくに、移民国家であるアメリカでは、このスキルを意図的に教えるという発想が強く、それが、ソーシャル・スキル・トレーニングという形で、学校・福祉・医療・NPOなどで、計画的にすすめるのはかなり一般的のようだ。カナダもそうである。この点でのヨーロッパの事情を私はよく知らないが、近年移民を大量に受け入れている西欧でも、こうしたことが浮かび上がってきているだろう。

ひるがえって、日本ではどうであろうか。コミュニティ的世界からアソシエーション的世界の移行は進んでいる。しかし、それへの意図的な対応が不十分だというのが私の見方だ。そこで、絶大な影響力を行使しているのが、マスメディア経由の文化なのだ。出会い系サイトなどは、その象徴である。その意味では、当の子ども・若者も、子ども・若者に関わる大人も、立ち遅れ、対応に苦慮している状況があるのではないか。

「民主的交わり」という提起がありながら、障がい児者教育などではかなりの取り組みがなされたが、全体的にみれば、その提起を受け止めきれない状況がまだまだにある。いじめ問題にかかわる国際共同研究などでも、そのあたりの落差、ずれを痛烈に感じさせられた。私自身は、90年代後半より子どもむけの「いじめ克服」ワークショップなどに取り組んできたが、なかなか広がらなかった。そうしたプログラムは、いまだに翻訳ものが大半を占めるのだ。最近もそうしたものが出版されている。

人間関係は、国・地域によって、歴史的背景がかなり異なるので、はじめは翻訳ものを使うにしても、早急に自前のもが必要だと思う。私自身のものは、少年院関係である程度の広まりがあり、2年前には、鳥取県の白兎養護学校のワークショップでかなり体系化したものを行っている。こうしたものをふくめて、私のワークショ

ップをまとめ提供できる作業を再開している。(自費出版で、浅野誠ワークショップシリーズ2『人間関係を育てる』2010年刊と言う形にした)

無論、こうしたプログラムなどによる取り組みは、それで完結するものではなく、当人たち自身の人間関係づくりを補助するにすぎない。当人たち人間関係づくりが本筋であり、もし教育的営みをするのであれば、それ自体にかかわる展開が重要となる。それは、既存のプログラム・ストーリーで行われるものではなく、当人たちが築いていく物語に即して展開していく。

それが日本の生活指導実践であり、その蓄積は莫大だ。そうしたことにかかわることが希薄、というか、かかわることに消極的な欧米とは対照的だ。その点も、生活指導実践の国際的交流に関わる論点の一つになろう。

1 2. 結婚と家族形成

2007年7月30日

山田昌弘「少子社会日本」（岩波新書2007年）に示唆を受けつつ、〈生き方〉の変更創造・沖縄について考える

同書は少子化問題を把握するうえで、わかりやすく示唆に富む書籍である。その示唆を参考にして、とくに沖縄の状況に焦点をあわせつつ、いくつか考えていきたい。

著者は、「日本で少子化が進んだ要因」を次のようにまとめている。

「一つは、経済的要因であり、①結婚や子育てに期待する生活水準が上昇して高止まりしていること、その反面で、②若者が稼ぎ出せると予想する収入水準が低下していることである。もう一つは、男女交際に関する社会的要因であり、③結婚しなくても男女交際を深めることが可能になったという意識変化、④魅力の格差が拡大していることである」P200

以下、いくつかの項目に分けて、コメントしていこう。

1) 若者の結婚・出産行動規定要因をめぐって

著者のこれをめぐっての説明はわかりやすい。

「A：結婚生活・子育てへの期待水準

B：二人が将来稼ぎ出せる所得水準の将来見通し

A>Bのとき 結婚・出産を抑制

A<Bのとき 結婚・出産を促進」(P70)

というものである。そして、近年、とくに1998(1995)年以降、A>Bの状況が広がり、それが少子化を促進しているという。「人は家族をもちたがっているけれどももてなくなっている」(P43)という現実、とくにそれをめぐっての格差が進行していることを示している。それは、近年の「ニューエコノミー」のなかで、「非正規就業」につくしかない若者という形で象徴されている。

この「ニューエコノミー」の時期、「経済の構造転換期」の1995年以降は、「恋愛格差拡大期」ともなる。

その前の時期、1975-95年は「経済の低成長期」であり、「恋愛の自由化期」(P67)とされる。

そして、「現在進行中の日本の少子化は、一九七五年頃から始まる。これは、『若者が結婚に期待する生活水準が高まり続ける』一方で、『若年男性が生涯稼ぎ出す収入見通し』が、頭打ちになったことによってもたらされた。一言で言えば、少子化は、『若年男性一人の収入では、豊かな家族生活を築くのは無理になった』という事実への『日本的対応』の結果生じたものである。」(P89) この事態が一層急激に進行したのが、1995年以降となる。

その際、イギリスや北欧などでは、成人したら子どもは独立するのが当たり前で、大学に行きたければ、自分

で学費生活費を稼ぐのが通常である。そのことが、「『結婚生活、子育てへの期待水準』が高くなることを防いでいる。」(P120) パラサイトの条件・慣習がある日本では、これとは対照的な事態を産む。「パラサイト・シングル」というキーワードで著名になった著者ならではの指摘である。

このあたり、沖縄ではどうであろうか。高等教育の学費を支払う親が増えており、パラサイトの状況は増加しているのだろうが、本土都市ほどの比率ではないだろうし、親の経済的水準もそれほど高くない。子ども自身が高等教育費用を自ら負担している事例もまだまだ存在する。

2) 前近代社会の共同体と近代社会の家族

「前近代社会では、経済的には、共同体や親族集団などが、いざとなった時に助けてくれた。(中略) 共同体に属していれば、そして、宗教を信じていれば、『長期的に信頼できる人間関係』が自動的に保証されたのである。」(P50)

「(近代は) 共同体が崩壊し、宗教が衰退したため、『長期的に信頼できる関係』が自動的に与えられる社会ではなくなった。だからこそ、長期的に信頼できる関係を『個人的に』作らなければならない社会になったのである。それは、多くの人にとっては、昔のような共同体や宗教集団ではなく、家族を作ることによって達成されるというよりも、信頼できる関係を『家族』という言葉で呼ぶようになり、それを自分で作り出さねばならなくなったのが近代社会の特徴なのである。」(P50~1)

そして、作りだされた近代家族は、性別役割分業で、夫の収入に依存する形が多数を占めたのである。したがって、非正規雇用男性では結婚する条件がきわめて制限され、近年の独身男性増加をつくりだす一因となっている。さらに高収入男性との結婚を求めるが、それがかなわないために、独身でいる女性の増加を生みだしているという。

この点でいうと、沖縄では、性別役割分業的な「近代家族」の「普及」が、本土都市部と比べれば、少ないのであろう。そのこともあって、夫婦共稼ぎが当たり前のように一般的であり続けた。そしてそれはたいいの場合、低収入であった。そして、徐々に比重を低めてきてはいるが、「共同体」的色彩をもつ組織が、共稼ぎ夫婦を取り巻いてきたのである。

このことが、沖縄特有のありようを形成しているといえよう。また、沖縄に限らないが、家族以外に「共同性」を求めるありようについての試みが重要なテーマとして浮かび上がっているといえるだろう。

3) 「できちゃった婚」

「『できちゃった婚』で生まれる子どもの割合も出生数減少県が圧倒的に高い。これらの県では、『できちゃった婚』以外で生まれる子どもの数は、激減していることになる。」(P25)

沖縄は『できちゃった婚』全国第一位で、嫡出第一子出生に占める比率は46.8%である。しかし、出生数減少率は、全国3番目に低いから、他の県とは事情が異なる。しかし、「『できちゃった婚』と若年失業率は相関する」(P190) という指摘はあてはまる。

4) 少子化対策

著者は次の四つの少子化対策を提示する。

①全若者に、希望がもてる職につけ、将来も安定収入が得られる見通しを ②どんな経済状況の親の元に生まれても、一定水準の教育が受けられる保証を ③格差社会に対応した男女共同参画を ④若者にコミュニケーション力をつける機会を (P208)

このなかの②にかかわって、次のように述べている。「日本の高等教育の費用は高く、ほとんど親負担である。この条件下で、親の収入格差が拡大したことが、夫婦あたりの子ども数の減少の大きな要因であることは間違いない。大学の学費をはじめとして教育費が高く、それを親が負担している日本と韓国で、収入の格差拡大とともに少子化が急速に進んだことを見逃してはならない」(P209~210)

沖縄では、子どもに大学教育を受けさせる経済力のある親の比率は、本土都市地域ほど高くない。家計のなかで住宅取得とならんで最大の難題となっている。大学進学率をもっとも低いレベルに位置する沖縄県だが、今後どうなっていくのであろうか。

※ 大学教育費の大部分が親負担になっている日本の高等教育のありようにもメスをいれる必要がある。

この問題は、90年代後半の大学サバイバル論議のなかで、18歳人口の減少に注目するにとどまる発言に対して、私は、親の経済力の低下(ないしは子どもを大学にやれる経済力をもつ親の量的拡大には限度があり、減少の可能性さえうかがわれること)に注目して考える必要があることをくりかえして述べてきた。この発言は、当時ほとんど注目されなかったが、今や現実味を帯びてきている。そして、大学進学させられるかどうか「格差社会」のメルクマールにさえなりつつある。

そのなかで、大学教育費の公費負担を求めることを基本にしつつ、学費を抑える大学教育のありようについての研究検討が、大学側に求められている

5) 生活のありようをめぐる

1) で紹介した「A:結婚生活・子育てへの期待水準」をめぐるである。私が以前から、今日の日本の生活のありかた・「経済的水準」は、世界の「中流」どころか「上流」に位置するものだし、地球環境破壊に与するもの、という考えをいできてきた。世界中の人々がこのような生活のありようをすれば、地球破壊になることは、もう数十年前から指摘されてきたことである。

だから、「A:結婚生活・子育てへの期待水準」についての検討提案が必要だと思う。しかし、この著書はそのことにまったく触れていない。その発想は拙著「<生き方>を創る教育」のなかでも述べてきたが、スローライフとかロハスとかいう表現で、エコロジストには通じるが、まだ広く市民権を得るものにはなっていない。気分的には多くの人々の共鳴をえてはいるが、多くの人々の生きかたの焦点的問題にはなっていない。

だが、沖縄にいと、とくに今の私が住んでいる「田舎」だと、ある意味で、ごく自然な考え方になる。「A:結婚生活・子育てへの期待水準」が、金銭的なもの、つまり商品的なものに収斂されるのは都市生活者には普通であろうが、生活における商品の比率が都市ほど高くない「田舎」においては、それとは異なるアプローチになるのである。

経済的にみると、たとえ「格差社会」の「下」に位置づけられようが、<生活>的には、「上」というか、「人間的に当たり前」、かつ地球環境に親和的なありようがあるのではないか。それをいかに追求創造するかが、21世紀を生きる私達の重要な課題なのではないだろうか。それは、「A:結婚生活・子育てへの期待水準」をも

っばら金銭商品的発想がとらえる発想をどのようにして卒業していけるのか、という問題でもあるように思う。その意味で、「田舎」が豊かに存在しつつ、商品的世界にもかかわる沖縄は重要なチャレンジ舞台になっているように思う。

2010年1月5日

生涯未婚率増加報道

12月30日に新聞報道された、沖縄県内の晩婚化、未婚化の進行は、正月に出会う人たちとの話題の一つだった。とくに50歳時点で未婚の男性が22%、女性10%ということ、あるいは、20~35歳の未婚率が男性65%、女性55%ということは、話題になりやすい。

とはいっても、周囲を見てみれば、珍しい話ではなく、「やっぱりそうなのだ」と再確認させられたという人が多い。

そして、それが時代の流れなんだろうとは思いつつも、この状態は危機的であって、なんとか婚姻率を高め、さらには、出生率を高めよう、という動きのほうにむいた発言によく出会う。個人のレベルでいうと、結婚出産しようという流れの行動を促す発言がとても多い。

そのなかで、肩身の狭い思い、何か悪いことでもしているかのように思わせられてしまう「当事者」が多いのではないか。そうしたシングルの人たちが、今後どのような生活を送っていったらいいのか、をめぐっての発言にはめったに出会わないのは残念だ。

そうした背後には、人間は誰しも、結婚育児をしなければならない、という固定観念が隠れ、そうしないことは「悪事」だといわんばかりの雰囲気さえ感じる。

そのあたりの発想の陰には、明治期の家族制度、そして、戦後の「核家族」観念が依然として生きている。その角度から、どの時代もどんな身分、階層、どの地域、文化にあっても、男女一対で結婚することが普遍的なことだという観念まで作りだされている。そして、その一対は、よほどのことがない限り、終世、生活をともにすべきだという観念さえ伴う。

10年前、トロント大学の大学院を終えて、進路についての悩みについて話してくれた女性がいた。日本には帰りたくないという。トロントではだれも話題にしないのに、日本に行くと、親・親戚がそろって「早く結婚しなさい」ということにうんざりで、日本には行きたくない、という。改めて、現代日本の「結婚絶対」観に気づかされた。彼女は、別の国に仕事をみつけた。

だが、男女一対の結婚というのは、観念は別にして、実際のところはそうなっているのだろうか。そのあたりは、家族史、社会史、文化人類学などの文献から多くを学ぶ必要があるだろう。ここでは、そういうものとは異なる生活をしている人が、一部例外ではなく、かなりの比率で現在生きているという事実だけを確認しておきたい。そして、そうした人々が、非難されるべきことを行っているわけではない。

そんなことを言うとしたら、人口減をどうするのか、と反論されそうだが、今の沖縄の人口は、100年前、200年前の数倍なのだ。歴史的に言えば、また、地球環境的に言えば、むしろ過剰人口が問題とされなければならないだろう。

2010年1月6日

「チュラサン」アパート 新しい共同生活のありようの創造

前回の生涯未婚率増大報道の話の続き。

多様な生き方があるし、その多様なものの各々を保障していくことが大切だと考えている私の関心の一つは、シングルで生きている人たちが、どのような共同生活を送り、作りだしていくのか、ということにある。

しかし、一対の男女を中心にした家族が標準で、それ以外は、「何かが欠けた」状態にあるという見方が広く存在している。また、家族においては、夫婦以外は血縁でなくてはならない、という考えも広く存在している。仮にそうでない場合は、養子関係を結ばなくてはならない、という考えもある。

また、人生においては、やむをえない一時期を除いては、家族で共同生活するのが標準だという考え方もある。そういうなかで、配偶者に先立たれた人は、結果的に独居になる例がとて多い。それを避けるために、遠く離れている子どものところに住む、あるいは子どもが引っ越してくる例が出てくる。あるいは、老人ホームなどの施設入居となる。だが、それはやむを得ざるものとして登場することが多い。無論、積極的ケースもあるが。

ずっとシングルできた人にして、途中からシングルになった人にして、独居でもない、やむを得ず施設に入るのでもない選択がないかどうかの検討は、意外に表にでてこない。

しかし、現実には、その検討・模索が求められている。では、家族以外の人々との共同生活はないのだろうか。自らすすんで、他の人たちとの共同生活を始めるという例である。自分たちで、建物を作ったり、借りたりして、共同生活を始めるのだ。

よく知られているのは、テレビ連続ドラマ「チュラサン」の東京のアパートの血縁のない多世代の共同生活である。一対の家族もその中に含まれている。ほかにも、高齢者と20代が共同で住むアパートがある。あるいは、血縁の有無にかかわらず、いろいろな世代が共同で住む多様な形態があつてよい。障がい者の方たちには、すでに始めている人たちがいる。

それらは、アパートや老人ホームのような形態だけでなく、コテージ群であってもよい。私が住んでいるような田舎の共同体的要素を残しているところでは、それを手がかりに、間接的な形での「共同生活」に類したものはできやすいだろう。田舎でも独居が増えている今、こうした角度からの検討の必要性が増している。

私が、移住計画を具体化する数年前に、高齢者の共同生活事例集にであった。大変興味深く、一緒に考えないかと、何人かに声をかけたが、一蹴された。

50歳前後の人たちには縁遠い話なのだろう。でも、長期に考え試行していくことが求められるので、むしろ50代こそが、考え始めるのに適切な時期だと思う。

いずれにしても、こうした議論、試行を積み重ねていくことが大切だと、私は思っている。

そして、そうしたことを応援することが大切だ、と思う。生涯未婚率を話題にする以上に、多様な共同生活のありようが話題になってほしいと思う。

2012年1月31日

家族の多様化 非婚化における生活単位のありよう

宮本みち子編著「人口減少社会のライフスタイル」(放送大学教育振興会 2011年)に示唆されて考える

家族の形の多様化について、本書は以下のように簡潔で要を得た記述をしている。

「結婚しない選択や子どもを持たない選択が可能になっているということは、家族を絶対的なものとはみなさなくなっていることを示している。また、家族内における個人の選択と決定が優先されるようになる傾向(家族の個人化)や、法や制度によって枠付けられた「家族のあるべき姿」が揺らいでいく傾向(家族の脱制度化)が強まっている。

家族の個人化が強まるにつれて、どのような家族を求めるのか、自分自身の希望と家族役割との洞察が大きな課題となる。また、脱家族化が進むと、家族のあるべき姿は法制度によって規定されるよりも当事者の選好にゆだねられる傾向が強くなる(家族のライフスタイル化)。

このような傾向は、欧米諸国ではより明確に現実化している。同棲、離婚と再婚の一般化という動向に最も明確に現れているといえよう。日本の家族の変貌は、それらと同調しながらも日本の独自性を有している面がある。しかし、日本固有の「家制度」規範は年長世代においてのみ支持されていることを考えると、世代交代が進むにしたがって、日本の家族も欧米諸国に近くなっていく可能性がある。

企業の終身雇用制や福利厚生が一家の生計を支える男性世帯主の役割を尊重し、社会保障制度が家族単位的生活保障を支える家族主義を前提にしてきたことが、日本独特の家族状況を生んだ。しかし、(中略)企業の雇用制度が変わるなかで、日本的家族主義は変容を余儀なくされている。」P118-9

結婚に対してどう関わるかについても、進行する多様化について、次のように記述されている。

「生涯未婚率(50歳まで結婚経験がない者の割合)は、男女とも上昇しており、2005年には男性の15.96%、女性の7.25%となっている。特に男性の上昇幅が大きく、世代が下がるほど、生涯未婚率は高くなるものと推計されている。

欧米諸国では法律婚の減少が顕著で、同棲が社会的に結婚の形態として承認されつつある。しかし、日本では同棲が増加する兆しはまだ弱い。近年妊娠を機に結婚するケース(できちゃった婚)が増加しているが、この現象は結婚制度が依然として機能していることを表している。

日本の結婚制度は基本的に揺らいでいないにもかかわらず、晩婚化と非婚化が急速に進んでいるということは、人々の結婚離れが進んでいるということであろう。

今後の予想では、生涯未婚率は現在の20代の女性で4人に1人、男性で3人に1人程度に達すると予想されている。日本社会は皆婚社会から非婚社会へと急速に転換しているのである。非婚化の程度によって出生率がどの水準になるのかが決まる。その水準によって、日本の高齢化率と人口減少の程度が決まることからして、若い世代の結婚行動は重要な鍵を握っているといえるだろう。」P119-120

日本では、「結婚するかしないか」の「オール・オア・ナッシング」思考が根強いだろうし、ヨーロッパの同棲

動向を紹介するこれらの引用文もその前提で論が進められている。

さて、このような非婚化などの進行は、人々の人間関係、とくに親密圏のありよう、また生活の最小単位をどのような形でもつのか、という問題を押し出してくる。それは「一人暮らし」だけではない。多様なグループホームのように、結婚や血縁ではない共同生活も増えていくだろう。そして、実際、そのような「一人暮らし」以外の多様な形が行われているはずだが、意外に話題にされていない。そうした議論がすすむことを期待したい。

実は、私も、ここ玉城に住み始める以前に、いろいろ調べ、周りの人に話題にしたが、『乗ってくる人がほとんどいない』ということに突き当たった。今ではどうだろうか。

無意識の家族絶対信仰が根強そうだ。しかし、高齢期を迎えるものにとって、この話題はもっと現実的なテーマなはずだし、また非婚ですすむ大量の人々には、「一人暮らし」以外を試みる人は多いと思うのだが。

2012年2月24日

結婚と家族形成 生き方 自由 人間関係

前回同様、宮本みち子編著本に示唆を受けて考えたことである。同書の「7 若者期の光景」では、結婚と家族形成にかかわって、とくに「進む晩婚化と非婚化」に焦点を合わせて、次のように述べられる。

「晩婚化、婚姻率の低下が進むだけでなく、結婚に対する意識にも大きな変化が見られる。男女ともに結婚することに利点があるとする割合（男性 65.7%、女性 74.0%）より、独身生活の利点（男性 83.8%、女性 87.2%）の方が上回っている。独身者男女に結婚に対する利点を聞いた結果を見ると、（中略）何よりも男女とも圧倒的に「行動や生き方が自由」を挙げている。それ以外では、女性は「広い友人関係を保ちやすい」が大きな割合を示しているが、「社会との関係が保てる」とともに 1987 年の調査時より減少している。結婚が女性の社会的関係を遮断してしまう状況は少なくなっているのだろう。男性の 4 人に 1 人は、「金銭的に余裕」「扶養責任がなく気楽」を挙げている。

他方で、結婚の利点に関して、男性の 36%は、「精神的安らぎの場が得られること」を挙げ、女性は「子どもや家族を持てる」が 45%を占め、1987 年の調査時の 35%前後よりかなり増加している。「社会的信用が得られる」は男女とも調査ごとに減っていて、結婚に関する社会的規範の拘束が弱くなっていることを示している（国立社会保障・人口問題研究所「平成 17 年独身層の結婚観と家族観」）。

このように男女で意識の違いが見られるとはいえ、結婚にメリットを感じる男女が減少してきている点は共通している。結婚することが、生活上、経済上明瞭にメリットがあった時代から、あえて結婚しなくともそれほど不便はなく、むしろ結婚によるデメリットを感じて結婚を回避する傾向（結婚離れ）が見られる。また、これまでの結婚モデルであった「結婚して男は仕事、女は家庭へ」という伝統的性役割分業に基づく家庭をつくることに男女ともそれほどメリットを感じなくなっているばかりか、むしろ男女ともにデメリットを強く感じているのである。」 P135~6

これまで、若者に結婚や家族形成を促すものとして、ここで書かれる「社会的規範の拘束」、「生活上、経済上」の「メリット」の他には、生物学的な視点などが出されてきた。

以上の引用のような展開の中では、新たに、「行動や生き方が自由」を求める感覚・行動のなかでの魅力として、結婚や家族形成を論じる必要が生まれてきているように思われる。

どういふ「行動や生き方」を選択創造するのか考える際に、結婚や家族形成を魅力ある高い位置に置けるようなものになるにはどうしたらよいか、という問題である。

それは、「広い友人関係を保ちやすい」や「社会との関係が保てる」などともかかわって、結婚が人間関係を抑え込むのか、それとも「保つ」だけでなく広げ促進するのか、といった問題ともかかわる。私流にいうと、人間関係を広げ深めるような結婚のありようの創造が求められよう。

こうした問題は、私自身も考えたことが少ない。これまでは多様な結婚・家族形成があることを論じるにとどまっていたからだ。新しい問題が登場してしまった。

2. 大人の若者への対し方

2.1. 親子関係

2005年5月28日

「非行」をきっかけにした親子葛藤と人生創造 I ストレーター秩序

7月16日午後、名古屋で、東海・「非行」と向き合う親たちの会（愛称「ひまわりの会」）主催「自己発見・他者発見・つきあい方発見ワークショップ」を行なう。その準備のために、会の通信「ひまわり通信」のバックナンバー合本を読む。生き方の問題にかかわって多くのことで示唆をうけたので、数回にわたって書くことにする。

この会は近年全国各地につくられてきて、多くの人々の参加と関心を集めている。この会に集う親は、わが子に対する期待が強い方々である、という特徴をもっておられる。と同時に、思春期になって親の想定をはるかに超えた「突然の表出」に驚き、いかに対処してよいかとまどっておられる方々でもある。思春期「トラブル」が直接の契機となったその後の多様な事態への対処で困惑模索しておられるのである。親のほかには「非行当事者」の参加、同世代の青年たちの参加もある。また、こうした問題に取り組む専門家たちの参加・助言なども多く寄せられている会である。

おそらく全国に共通するだろう、以上のような特徴に加えて、愛知を中心に三重・岐阜などを含んだ東海地方の会ということが、ひとつの特徴をつくっているように思われる。それはこれから述べるが、私のいうストレーター秩序が比類なきまでに確立浸透し、そこからはずれて生きるという選択にはとりわけの困難がともなう地域ということである。全国的にみればストレーター秩序は崩壊しつつあるのだが、この地域においては部分修正にとどめ、「本体」はなお「健在」であると思わせるような状況がある。その背景には、トヨタを軸にする自動車産業・製造業などを中心とする経済的な事情が、他地域と比べると抜きんでて「好調」であり、バブル崩壊さえ隠れてしまう状況がある。

どうしてこうしたことをいうかという、私のいうストレーター秩序は、1960年代に確立した企業社会と結合しているからであり、1990年代におけるバブル崩壊によって、その終焉、もしくは修正がもたられるようになったにもかかわらず、この地域では依然としてストレーター秩序が「幅をきかし」ているからである。そして、そのことが、この会報での親や当事者の発言のなかに色濃く反映しているからである。

日本では、1960年代に成立した大衆の青年期は、「より偏差値の高い」高校→大学→会社へというストレーター秩序と結びついて進行することになった。愛知では、この流れの前に「私立中学」を加えたほうがい

いかもしれない。

一般に青年期はモラトリアム（猶予）のなかで多様な試行錯誤・チャレンジをし、多様な生き方に出会い、そのなかで自分なりの生き方を発見創造確立し、成人していくものとイメージされている。しかし、現実には、生き方の創造へと向かわずに、偏差値システムのなかでどの位置を占めるかによって人生コースが決まるという形になってきた。その偏差値は受験5科目の点数に焦点化される。だから、普通科高校至上主義が生まれ、実業高校・定時制高校、単位制高校に入学することすら「敗北」とみなされたりする。そこでモラトリアムの「結果」は受験科目の点数ではかられることになる。その受験科目は、かつこよくいえば「教養」ということにされ、現実社会とのかかわりは薄く、コースからはずれがちなものにとっては、そのことを学ぶ意味がよみとりにくいものとなっていく。そして「教養」＝受験科目＝基礎学力とつなげられることさえみられる。

こうして青年期が、受験科目での点数を高くする営みに変身するのである。それは現実社会での「生きるちから」とほど遠いものとなっていく。学ぶことの意味を考えようとする思春期をまともなものにしようとするものにとっては、大変困難な事態になる。そんなはざまをつき「現実社会」を若者にみえやすく紹介してベストセラーになったのは、本通信にも登場してくる「13歳のハローワーク」である。

こんな世界に置かれた10代半ばから後半にかけての若者たちは多様な形での疑問を発しはじめる。この通信のなかで、「非行」の問題が中学高校への通学の問題とかかわらせて登場してくることがとても多いことが、こうしたことを物語っている。と同時に、若者たちは、学ぶことの意味を学校のなかに見出せないが、友達との関係で見出して通学を継続する。あるいは、その関係を学校内にみいだせず、あるいは「自主退学」させられて、学校外の「非行」仲間たちとの友達関係、仲間関係を見出して、人生発見創造を展開していく。

そんな若者たちに対して、学校はほとんどの場合対応できない。受験科目で点数をとることを要求し、「非行」から離れることを要求する。こうしたことを、ある親は「いろんな価値観が横並びになっているはずなのに、縦に価値を並べる社会になっていると思える」と述べる。

こんなストレーター秩序、受験科目学習を中心にした秩序、学校の下請け機能を家族に果たさせようとする秩序のなかで、親は何ができるのであろうか。これについては次回述べよう。

2005年5月31日

「非行」をきっかけにした親子葛藤と人生創造

II 親・家族はいつまで子どもの面倒をみるのか

ストレーター秩序、受験科目学習を中心にした秩序を子どもがきちんと歩むようにしむける機能を親・家族に果たさせようとする強力な流れのなかで、親・家族は何ができるのであろうか、できないのであろうか。あるいは、親・家族がしていることは何で、したらまずいことは何なのだろうか。

このことはさらに、15歳以降、20代まで、あるいはパラサイト・シングルという言葉が示唆することによって、30代まで親・家族が子どもの「面倒」をみるというありようはどうなのだろうか、という問いかけにもなる。

こんな問いかけ自体に不思議な顔をされるかもしれない。「そんなことは当たり前の常識なのに」と。たとえば、わが子が犯罪にかかわった際に、まず第一に親の責任が問題にされる。今日の日本の法律上は、20才まではそういうことになっているのだが、20才を越してもそういわれることがしばしばである。

それにはまずは「20才が妥当なのか」という問いかけがある。「子どもの権利条約」が示しているように、世界的には18才が通例である。

また、18才にしろ、20才にしろ、その区切りの前後で、親の責任の有無を切断していいのだろうか、という問いかけがある。カナダに滞在しているときに、ホームレスの若者が多いことに驚いたことがある。18才を過ぎれば、経済的な意味も含めて「自立」しなくてはならないのが「常識」であり、その結果として、若者のホームレスが出現しうるのである。日本ではめったに出会わないことだろう。名古屋の大通りの歩道を小学生が一人で歩いていることにアメリカ人とともに出くわした際、彼女に「アメリカでは、児童虐待に扱われる」といわれたことがある。カナダでも12才くらいまでの子どもが、大人なしで自宅にいるとしたら、児童虐待として処置される。

こうしたことに私は違和感を覚える。年齢を区切って、それまでは親の責任、それ以降は親の責任ではなくて本人の責任という、二分論には興味深さは感じるが賛同できるというわけではない。

といっても、20才過ぎても、30才代になっても、親の子どもに対する責任を問うような考え方にはなおさらついていけない。無論、やむをえず経済的サポートをすることは日本の現状のなかでは広く存在している。それは、国家や自治体の社会的対応の貧弱さの問題でもあるととらえたい。大学授業料がきわめて高く、かつ奨学金システムの不備さがその象徴であろう。カナダにいた折、圧倒的多数の学生が、奨学金と自分で稼いだ資金でやりくりし、親支出はわずかであったのがとても印象的であった。入学前の、主に高校時代のアルバイトで学費稼ぎをするのが通例であった。

日本でも、親が子どもを経済的に支えられるのは、大半の場合、あと数年ないしは10数年ぐらいのことだろうと、私は推理している。支えられるのは、年収600万円以上ある親の場合に限定されるのは今日でもそうだが、そうした収入を確保できる親の比率の激減が予想されるからだ。

ここまで述べてきたことは、これまでの普通の考え方でも理解可能な考え方であり、びっくりするようなものでもない、と思う。しかし、ここで論議がとまっていたはずで、と私は思う。

私の問いかけは、10代半ば以降、果たして親がわが子の面倒をこんなにみていいのだろうか。あるい

はさらに根底的に親が子どもの面倒をみていいのだろうか。ということである。そして、そのことが、子どもの成長を、さらには親自身の成長をとどめてはいないのだろうか、という疑問があるからである。ひいては、その時期にまで親が子どもの面倒をみるのが、非教育的反教育的なのではないか、という疑いすらもっている。

だが、この問いかけは、人類史をみてみれば当然のことだ。15才以上まで親が子どもの面倒をみるというのは、稀なことだった。日本でもつい数十年前まで、ごく限られた富裕層を除けば、たいていは12才ないしは15才以上になると、子どもは親から離れていった。家業を継承するために親と同居するにしても、子どもの自立性は強かった。職業上の「指導者」として親がかかわることがあったとしても、たいていは地域社会や若者組・娘組などの同世代の集団のほうがかれらの面倒をみていた。仮親をたてて親からの自立を確認する儀式もあった。

親・家の役割を強調した戦前の家制度にあっても、15才以上の子どもに対する親の日常的な教育を想定してはいなかったであろう。10代半ば以降は、地域集団の責任として、若者組・娘組、あるいは仮親などがかわる課題として提出されてきたのである。

日本では1960年代にひろがった大衆的青年期が、こうした事態を大きく変え、15才以上も親が子どもの面倒をみるありようをつくりはじめた。しかし、親側にしたら、そうした経験が存在せずどうしたらいいのか不明なため、大衆的青年期を広める動因でもあり結果でもあった学校に依存・従属して考えることになったが、そのころ以降、日本の学校はストレーター秩序におおわれてきたため、ストレーター秩序としての大衆的青年期が登場したのだ。

こうしてみると、親・家族が、青年期教育についての経験・力量を高めたというわけではなく、むしろ逆に、親離れをさせないという形で、教育力を弱めたとさえいえるのかもしれない。そうであるにもかかわらず、親の教育責任がいわれる。そこで、結果的に経済的援助のみで表現するしかない、というのが多くの親の現状ではないのか。あるいはあたかも10才以下の子どもを扱うようにして、15才以降の子どもを扱うという事態を継続するしかない状況を生み出したのではないか。ストレーター秩序に適合的な親子関係は、10才以下の親子関係だとさえいえるのではなかろうか。

そして、親離れ・子離れを進行させないことが思春期・青年期葛藤を逆に激化させ、問題を複雑化しているとさえいえるかもしれない。10代半ばから後半にかけての親子トラブルは、大半の場合、こうした要素を多分にもっている。そこで、うちの子どもは「おとなしくて、問題を起こさなくてよい」という幼児期的なまなざしで、子どもを肯定的評価する傾向さえ生み出している。そうした「おとなしい」子どもが、じつは思春期・青年期葛藤を遅らせ、時にそれを「突発的」に表出して、親を困惑させる事例がかなり多い。

だから、親・家族がストレーター秩序型「学校」に追随するのでは問題は解決しない。むしろ、そうした秩序を相対化し、自分たちなりの歩みをはじめたときに、はじめて思春期・青年期を前向きに創造できていくのではないだろうか。親の側にひきつけていうと、私がかねてからいってきた人生の後半期へとスタートできるのではないだろうか。

それは、「親子関係からの卒業」であり、そうしたステージにたったとき、親子以外の多様な人間関係の一つとして、親と子どもが親しい間柄をもちつつも、親子関係ではない形で新たな関係をつくっていきけるのではなかろうか。

ここで、「子ども」という用語の問題性が浮かび上がってくる。つまり、「年齢が低い」という意味と、親にたいする「子ども」という意味の二つがある。この区分ができないままに、「わが子＝幼い」というイメージをもって「わが子」を指導援助監督しなければならない、という強迫観念に悩まされているのではなかろうか。だから、新たな用語使用が求められるといえよう。

この話はまだまだ続く。

2005年6月11日

「非行」をきっかけにした親子葛藤と人生創造

Ⅲ 閉鎖から開放へ

わが子が難しい問題を抱えると、家族は閉鎖的になりがちである。たとえば、保護監察官の木村さんは、「子供の問題が起こるとそれを隠そうとして、家庭が閉鎖的になる。そうなるとますます悪循環に陥りやすい。人の出入りを活発にしないといけない。」と述べる。

「祖母は世間体を気にしているので祖母の親戚には話していない」「祖父が教育者なので、高校は卒業してほしいと望んでいる」という話もでてくる。親が教師などの「社会的地位」のあるケースでは、余計に閉鎖的になり、硬直化してしまう事例をよく耳にする。

そこで、「親の責任」が強力に当の親たちにのしかかってくる。あるいは、どう対処していいかわからず、見守るしかない状況に置かれると、「愛情がないのか」という攻撃、あるいは自責の念さえ生じてしまう。親たちは「責任」や「愛情」という言葉にとっても弱いのである。それが、結果として、親・家族からの離脱が課題となっている思春期・青年期に、逆に親子関係を強力にし、絶対化する力学が働き、親子関係を相対化することがますますできなくなってしまう。

そして、「最後は親のところへ戻ってくる。根気よく待つしかないと思う」「主人は、『やりたいことをやらせろ、わかれば戻ってくる』といっている」という、いってみれば「戻ってくる信仰」を生み出す。それが、かえって「親が心配してくれているのは全部分かっていた。でもそれがうざったかったという子どもの思い」をつくり出し、事態の前進をうみだすわけではない。

さらにまた、親はこうした事態にあるとき、子どもを友だちから切断しようとする衝動にかられる。場合によっては社会からも切断しようとすることもある。そこで、「娘の友達で、『学校行かないのなら家から出て行け。近所をうろうろするな』と親から言われた子がいる」ということがでてくる。

こうした考え方・行動にいきつく背景には、家族としてのまとまり、親子の関係の濃密さを「標準」「普通」とする考え方がある。

その「標準」「普通」にあっていないのではないかという不安が、閉鎖へと駆り立て、さらにまた、子どもの「友だち関係」に対して、親が監督管理統制しようとし、子どもが積極的に外にでていき、「友だち」関係をつくることに消極的になる。

余談で30年も前の古い話で恐縮だが、我が子が白血病で入院中に、多くの親子関係にであった。そして、その体験の10年後に「白血病の子どもを守る会」で活動している方の話を聞く機会があった。私たちが学んだことが共通の課題であることを知った。それをまとめていうと、夫婦が団結することが大切であり、子どものために捧げ尽くすというよりも、夫婦が自分たち自身を守りながら、子どもとかかわっていくことが大切である、ということ。その折、祖父母から独立して夫婦が判断することがとても大切である。活動してきた方は、まずは祖父母から独立して、夫婦が判断することが決定的に重要だと語っていた。また、夫婦の大変さ、子どもの大変さをいろいろなところで語り、大変さを共有しながら、前向きに事態に向かっていくこと、などである。秘密にしても何のプラスもない。そして、この苦難にみえる生活のなかから、どんな形でもいいから前向きなことを発見していくこと。私の場合、死期に近いながらも、そこでみせる息子の成長、私たち夫婦自身の成長をみるなかで生きてきた。

こんなことを思い起こすと、「優しさとは人を肯定的に受け止める力のこと」（多田弁護士）という話は心に響く。

本題に戻ろう。この通信のなかに書かれている多くの親のなかには、複雑な思いがある。たとえば、片方で、子どもたちが青年期を豊かに創造的に個性的に生きることを期待したい、という気持ち、子どもの難しい行動の背景にはそうした模索があるのだ、と把握したいという気持ち。もう一方で、「世間なみ」に「ストレーター秩序」で「よりましたな」生き方をしてほしい、「せめてストレーター秩序からはずれてほしくない」という気持ちがある。この両者の揺れのなかにいるというのが、大半の親たちの実相であろう。

こうした気持ちが、子どもに対して、「自分が考えるようにしなさい」というメッセージと、同時に「それはストレーター秩序の中で、ですよ」というメッセージとを同時に送り続けるという、ダブルバインド的なものになってしまう、という今日的難しさが反映してしまう。たとえば、「高校には行ってほしいという世間体と、子どもを認めなければという想いで揺れ動いている」という発言が生まれるのである。

そして、今日、ストレーター秩序が大きく揺らいで、新たな生き方を創造しなくてはならない時代にあって、日本のなかでもっともストレーター秩序が「健在な」東海地方という「難しさ」が事態をより複雑化している。

こうしたダブルバインド的考え方がでてくるということは、今日という、歴史的特定の時期の特質であり、また、東海地方の今日の状況の特有な性格を色濃く帯びていることを知っておいたほうがいだろう。

ついでいうと、「アクティンアウト」とか、「退行」とかいう用語がでてくるが、それは大衆的青年期特有の用語であり、なおかつ今日の東海地方という特有の状況のなかで特別に意味をもつ用語ではないのか、とみてはどうだろうか。何も昔から世界どこでもあったことではないのである。

こうした閉鎖へと追い込む状況をつきぬけて、開放へと向かうことが一つの要点だと思う。そこで、多様な人々に開放し、開放できる人たちのネットワークと出会うこと、これが重要なポイントであり、また「ひまわり会」の大切さを示していることを強調したい。

2005年6月14日

「非行」をきっかけにした親子葛藤と人生創造 IV ストレーター秩序に代わるもの

「標準にあわせて」「普通にいかせたい」という親の気持ちは、しばしば「世間体」と重なる。「世間体」とは、数十年前まではムラの秩序であったが、1970年ころより「ストレーター秩序」になりかわってきた。そのストレーター秩序が崩壊してきている今日、それに代わるものがないことが不安を駆り立てる。商品＝市場万能時代といっても、商品＝市場はそれに代わることはできない。それに代わるものをいかに作り出していくか、それは私たちが共同創造していくしかないし、そのありようは実に多様であるはずだ。そして、多くの人々がそれをつくることへと向かいはじめています。多分に試行錯誤的であるとしても。

しかし、これまでのストレーター秩序にこだわりつづける人は多い。たとえば親自身がストレーター秩序のなかで一定の地位を占めてきた企業人、およびその秩序を「模範」として宣伝してきた教師、およびその秩序でかなり優位な位置を確保してきたエリート・医師は、それに強くこだわりつづける。そういう人々は、そこからいかに卒業できるかという課題と、それに代わるものを創造する課題とが並行する。

そんな葛藤のおりにでてくる言葉として、「『仮面をぬいでみんなで助け合っていこう』と言える社会にしたい」がある。なるほどと思いつつも、『仮面』をぬいで「本心」があるのか、育てられてきたのか、とひるがえって考えると、少々自信がなくなる人が多いのではなからうか。また、こんなことが登場するかもしれない。それは、「自分の好きなようにしなさい」というメッセージを送るが、社会的な生き方という点でみると、子どもたちは自分の好きなようにする環境のなかに育てられてきたのだろうか、という問いである。

こんなことを考えると、「人はハードルに行き当たった時、少し退行して人に甘えることができると、そのハードルを乗り越えて進歩することができることを知りました。そして、娘の前にあったハードルを下げたことで、彼女のお蔭で私も変わることができたと思います。共に良い方向に成長できますよう心を繋ぐことに心がけ、心とらぐ日々が一日も早く訪れますように家族全員が笑顔で暖かく見守り、援助していこうと考えております。」という発言は、共感できることが多いが、「ハードル」とか「ハードルを低くする」というとらえ方が気になってくる。

その点では、ダルクの人の語りにはとても興味がひかれる。

「薬物を使ってました。と言う場所がない。職場、親にもいえない（怒られるから、正直になれない、認められない）。私たちは、薬をやめるとは一度も言ったことがない。何百回も言われてきた人がやめるといわれて、やめられる訳がない。『使いたければ使っていいよ。自分の責任でやってくれ。でもやめたければ一緒にやろう。』『使っていいよ』というのと、とまどう。『死んでしまう止めてくれ』と思う。」

「自分のやった責任は自分で取らせる。親は味方で居るだけ」「泥棒したら迷わず警察を呼ぶ、自分の責任を取らせる。親が肩代わりしたり、後始末したりしては、エスカレートする。」「自分で稼いで吸えと言った方が説得力がある」

「親が自助グループやカウンセリングなど自分のケアを先にして。持っていない物を人に与えることは出来ない」

「人間関係がへた。ダルクの考えでは、薬で薬物依存は直せない。解毒が必要であればそういう病院もある。病院をあちこち行っているとかえって薬物依存になる」

「親がしっかりしていると、子供が大人になれない」

ところで、親が子どもに対してよくいう言葉、つまり「～～するな」「～～してはいけない」といった禁止の言葉は、教育の言葉ではなく、治安・管理の用語であることに改めて注意を向けたい。教育は、何かを育てるわけだから、禁止だけでは教育の領域には入らないのだ。

とくに、思春期以降は、他者としての親子の新たな出会いの時期であり、他者としての出会いを通して、新たなつながりの出発点とすることが大切であることを確認しておきたい。その意味で、「親が子どもの尻拭いをしすぎである、押し付けでなく子ども自身で償い相手の傷を想像する力をはぐくむ練習ができていないことを感じる」という指摘は大切だ。

ストレーター秩序に代わるものということを書いてきたが、対抗する生き方を提案し、実行するということは、ときに「別世界を生きるかのような」感覚さえ与えかねない。そこに不安を感じる。ストレーター秩序のなかにいる人にとっては、「村八分」にさえなる覚悟が必要になり、それがまわりからの孤立を生み出しかねない。

そこで、「対抗」するほどではなく、まずは「異議申し立て」をするというアプローチがあることをみておきたい。そして「ひっそりと」「こっそりと」異議申し立てをし、「ストレーター秩序」「共同体」から「一定の距離を」とって生きるというありようも検討してみてもどうだろうか。

そのなかで、響き合う人を見出して、共有するものがあれば、なんらかの集まりをつくっていくという道筋があっただけではないか。「ひまわりの会」もそんな性格が濃い集まりであろう。

2005年6月14日

「非行」をきっかけにした親子葛藤と人生創造 V 人生創造へ

このシリーズもここで最終回としよう。「ひまわり通信」の最新版の合本をいただいたので、本当はそれをもとに追加する必要があるかもしれないが、それは別の機会にしよう。

これまで述べてきたストレーター秩序が強いところ、つまり「異議申し立てをまっこうからしにくい」ところでは、自分および親を「崩す」という形で、とくに「非行」という形をとって自立を追求するしかない。現代の「非行」は、ストレーター秩序からはずされたもの、あるいははずれたいものが異議申し立てができないがゆえに、きわめて歪んだ形で、引き起こすケースがかなり多いのではなからうか。ストレーター秩序、ないしは大衆的青年期の矛盾の爆発とでもいえるかもしれない。

ストレーター秩序に我が子を囲い込む役割を家族がにない、家族はわが子がストレーター秩序以外には触れさせないようにしてきた。だから、「世界を知らないから、洗脳しやすかったのだと思う」といわれるのである。

その点で、「非行」体験者ひろしの講演は興味深い。

「高校中退 知らない世界を知っていく感動、喜び 不登校・喫煙・夜遊び・シンナー・無免許運転・その他」

「仲間との関係 今でもかけがえのない親友 みんなで集まる楽しさ 家庭環境はまったく違うけれど、やってきた感覚は同じなので考えていることもなんとなく分かる。今でもかけがえのない親友」

「普通の人から見たらまったく理解できないと言われるが、後悔はまったくない。むしろこの生き方をえらんで正解だったとしか思えない。無理に縛られることなく、やりたい事ができ、なにより同じ時間を過ごした友達がいるから」

また、弁護士の方の次のような発言も興味深い。

「引きこもり→マスコミがつけたマイナスイメージ。心が傷ついている人が、自分の生活空間で守っている。その人の生き方。引っぱりだして人との関係を作るのはおせっかい。昔から精神を充実させる時はこもった(僧侶とか)。こもるに引くをつけたのはマスコミ。社会から引いているのは、こもっているのは非社会的か? こもりながら社会との関係を取っている。(中略) こもるのもプロセス。経済的にだめでは? 親がスポンサー。昔の音楽家なども貴族とかのスポンサーが付いていた。忙しく働いている人に逆に文化活動は出来ない。必要と本人が感じればでてくる。他人が否定する。自分が自分を否定する。いつの間にか大人の価値観で考えてしまう。いい子で通してきた子どもが思春期になって自分の物差しをもっていなかったことに気づく。お互いに認めあうことが大切。」

そして、「非行」からの「回復」は、保護観察にたずさわる人がいうように、「『自分は家族に期待されて生まれてきた』ことを確認し、『自分も社会に必要な人間』であることを発見することによって、場当たりのあるいは自暴自棄的な生活姿勢を転換させることができるからです。」という形をとることが多い。

これらは、ストレーター秩序、ないしは大衆的青年期に代わるものの提案・創造こそが「非行克服」の本道であることを示唆していよう。

そして、思春期・青年期における子どもの「非行」とかかわりは、親の側の人生後半期のありよう模索追求の契機ともなることを指摘しておきたい。そこで、「親自身幸せかどうかが問題、子どもが気を使ってしまうように思う」という発言に注目したい。

こうして、「非行」にかかわった若者本人だけでなく、親も新たな人生創造への旅立つことが求められ、それを孤立してではなく、多様なネットワークのなかで展開することもまた本道となろう。

そのネットワークとしての重要な出発点の役割をこの「ひまわり会」が果たしており、この会の企画は、その出発点となるきっかけをつくり出すための〈異質発見〉型の企画に満ちている。

だが、多田弁護士がいうように、あちこちの講演を聞いて、いわれたことにふりまわされて混乱するような事態を避けたい。その意味では、この会でも講演形式よりも、参加者が共同でつくりあげていくワークショップ形式が多用されていいと考える。

しかし、残念ながらワークショップ形式はなじみが薄いし、話題提供者（講演者）自身もワークショップを知らない。ときには自説をとうとうと述べることに「快感」を覚えたり、それを「仕事」にしている人もいるが。そうしたありようからの「卒業」こそ大切なのだ。

この会が、以上述べてきた方向で新たな創造へと向かわれることを期待したい。

2006年7月16日

人生ユンタク第五回 「親子関係」

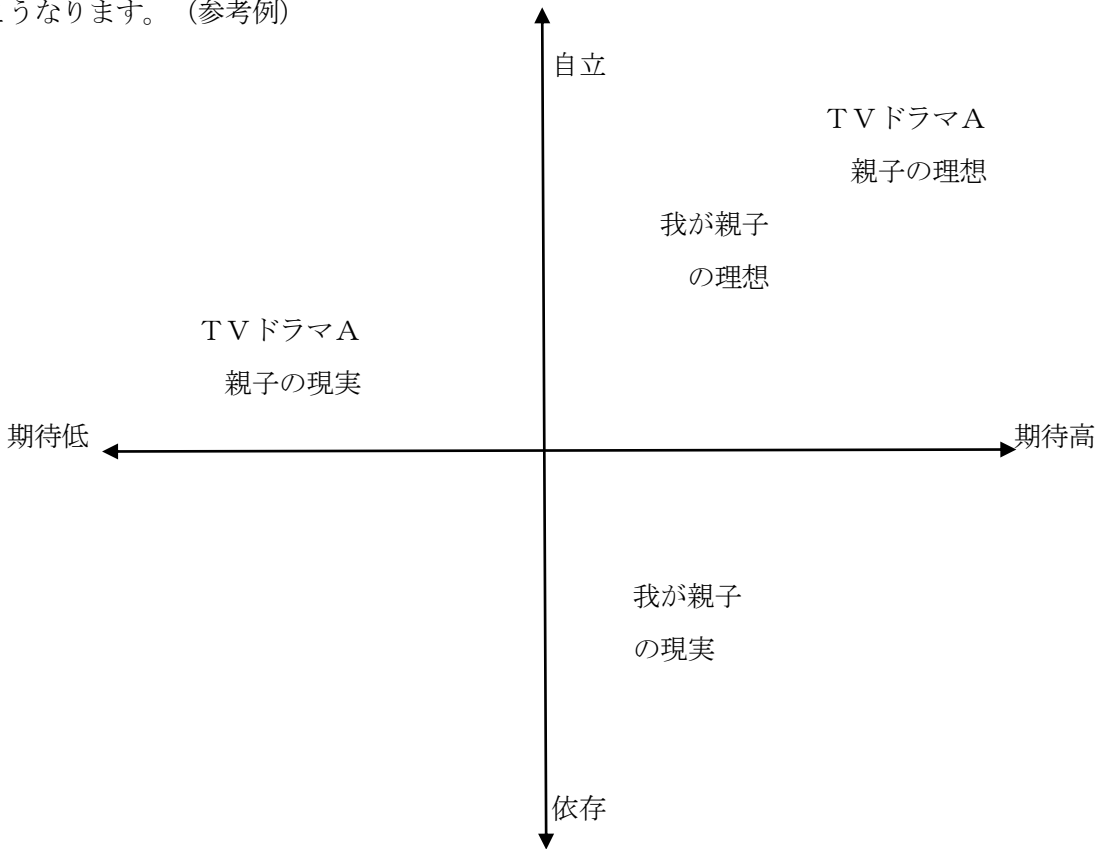
この集いも5回目となった。第一期として6回を予定していたので、一区切りが近づいた。毎回、常連・新人を合わせて、年齢、職業、居住地などいろいろな面で多様な方々が集まれる。それだけに発見が多い会となり、夜遅くまでユンタクがはずむ。

テーマは、次回のを投票で選ぶので、これまた多様に変化する。今回は「親子関係」がテーマである。最初に、次のようなグラフを一人ひとりが書いて自己紹介したあとで、ユンタクに入った。

.....

私の親子関係イメージ（理想と現実） グラフ作り

体験・観察などにもとづいて、「親子関係」の「理想」バージョンと「現実」バージョンをグラフにすると、こうなります。（参考例）



基準には、いろいろありますが、参考例をあげますので、自分で設定してください。

濃密-淡白 平和-対立 距離近い-遠い 単純-複雑 依存-自立 上下-横（ナナメ？）

参考例をもとにして、自由にグラフを作ってみてください。

グラフをもとに、自己紹介風にお話ください。参考例のなかには、自分自身の例と、TVドラマAに登場する親子例を書きこんでみました。

.....

基準として参加者が出したものは、対話時間の多少、共感の度合い、依存と自立、期待の高さ、濃密と淡白、

安心と不安、などであった。

ユンタクは多彩になった。親の介護、思春期の「反抗期」、財政、子どもへの介入、自分の子どもと生徒（学校教師の場合）、さらに発展して夫婦関係、本土と沖縄における人間関係などへも「脱線」していった。

あらためて感じ考えたこと一つ。「不幸」に思われるにしろ「幸」に思われるにしても、いずれも親子関係を「外側に開いていく」ことが大切だということ。近年、親子関係を内側に閉じていく力学が強力に働いている。とくに「不幸」な親子関係の場合、その力学が強くと、親子の「責任追及」的な様相さえ強くみられる。それだけにかえって、「内側に閉じていく」。

そうではなくて、「外に開いていく」こと。そのことによって、親子の外側にある世界との交流、協同関係が増えていく。そして、多様な親子の形を知り、そのなかで、自分の親子関係を相対化していく。「いろいろあるんだな。いろいろな親子と交流しながら、いろいろな親子関係をつくっていこう」という具合にだ。「内に閉じる」場合には、標準の親子関係を想定し、その標準にあわない「不幸」を悩み、親子間の葛藤対立を過剰に強めてしまう。世の中には、実に多様な親子関係のありようがあり、その多彩さが世の中を「おもしろくしている」。「標準」とか「模範」とかいうものは実は例外的なものであり、「幸」とは限らない。むしろその「幻想」に囚われていることさえ多い。多様である個々のドラマが、多様な親子関係を「幸」の方向へと発展させていき、かつ親子をとりまく人間関係を豊かにしていく契機をつくりだしている。

多様な親子関係ということ、思いつくままに列挙してみよう。実の親子、婚姻によって成立する親子、養子関係の親子、今ではあまり意識されないが「仮親」的存在。成人以前の子どもとの間の親子関係。ともに中高年である親子関係。単位の家族を超えた親たちと子どもたちの関係・・・・

そして、親子関係の発見・交流・協同をおしすすめる場を列挙してみよう。学校での親子討論会。子ども会などでの行事。保育園の保護者会。親子合同キャンプ。今回の人生ユンタク。地域行事。こんな多様な機会を豊かに生かしていきたい。少ないところでは、そうしたものを多様につくっていききたい。こうしたものは、時にわずらわしさを感じることもあり、それから逃れたいという気持ちを生み出すこともあるが、そうであったら、気おけない家族間関係をいろいろと試してみるのもいい。そうしたネットワークをつくることを大切にしたいものである。

2007年4月16日

通学時の親による車送迎を減らそう、やめよう

沖縄に再び住みはじめて3年近くなる。沖縄の教育についても気づくことが少しずつでてきた。それを「沖縄教育への提言」の形で時々書いていくことにしよう。

20年前私の子どもたちが西原小学校にいたころ、40～50分かけて徒歩でサトウキビ畑のなかを通学していた。通学途中の「道草」が、自然と友だち・大人たちとのつながりを豊かに育てた。無論、足腰も強くなった。どこでもそうだった。

このごろ、小中高校で、親の車で送迎するのが大変多くなった。通学途中の危険があるからという。しかし、その結果、通学のなかでの自然・人々とのつながりが減り、自然と人々について学ぶ機会の激減という危険、子どもの親依存が過剰になる危険が増加している。

両者の危険を避けるためにはアイデアが必要だ。子どもたちが連れ立って登下校する。それに余裕のある大人（親でなくてもいい）が付き添う。車が必要なときは、数家族がまとまってやり、家族間の連携を豊かにする。などなど。こんな話を浅野恵美子も提案しているが、それを聞いて実行に移している話を聞いた。嬉しいことである。

アイデアを出し合い、チャレンジしましょう。

2007年4月27日

オープンで豊かな交流のある家

先日、知人の家を訪問した。20畳以上の広いオープンなスペースで、数人の大人たちが飲み会、大きなテーブルでは、子どもが学習、台所でつまみをつくる人、さまざまな人が各々のことをしながら、相互の会話がとび、交流しあう、大変すばらしい光景である。

最近の家庭は、閉じがちで、訪問しても玄関か応接間だけというのが多いのとは対照的である。そして、大人と子どもがいっしょになって、外部の人もかかわって交流するというのもステキである。

私の近隣には、こうした家が結構ある。親子でいっしょに海にでかける人も多い。

私達の集落でいうと、モチツキ大会、「連れ立って登校」などという風に、家族間協同、大人・子ども協同をしていこうという動きが広がっている。

確かに、ここ20～30年の間に「教育熱心」が広がっているが、それが、子どもへのサービス過剰・過保護状況、閉鎖状況をつくりだし、子どもの受身性、社会性未熟をつくりだしてはいないだろうか。お金をかけることがうんと増えたが、それに比例した子どもの成長があるだろうか。反比例している心配な例さえありそうである。親の保護から離れた時に、子どもは自分でやっていけるのだろうか。親の過剰保護への反発からの悲劇も跡をたたない。

こんな心配とは対照的な家庭への訪問で、私は、おもわずほのぼのした気分になってしまった。

2007年6月17日

教育・子育ては物語創造風に

教育・子育てには、定められたルールを進むようにするものと、物語創造風のものがある。実際のところ両者双方が必要になるのだが、現在のところは、ルール型が90%ぐらいで、物語型が10%ぐらいといったところだろうか。競争の強調はもっぱらルール型で行われる。

実際の人生は、20%対80%ぐらいの比率で進んでいると思うが。だから、ルール型ばかりで進んできた人が、ルールから外れた時、ルールがないところを進むとき、大変困ってしまう、ということをよくみかける。

そして、幼児期や小学校低学年の教育や子育てにも、ルール型が強すぎて、かえって多くの問題が噴き出ている。競争過剰のルール型のなかで、孤立がちになり、人づきあい下手の子どもが大変多い。

子どもたちには物語型の教育を少なくとも60%以上はしてほしいと思う。それは、お話を聞かせるということもあるが、それだけでなく、たとえば野球をするにしても、大人が全部仕切って、サービスして子どもたちはそのルールにのっかってやるというのではなく、その日集まった人数・年齢によって、一番適したルールを子どもたちがつくってやるというやり方が大変良いことなのである。このやり方は30年以上前では当たり前のことだった。

勉強もそうである。宿題やテストがないと、勉強しないというのではなく、子どもたちが自分なりの物語をつくりながら、どんどん勉強していく、というありようを大人がどれだけ励ませるのか、が大切なのだ。

2009年2月1日

「仲良し親子」の顔をした過剰な相互依存

このごろ、「親子は仲良しなんだ」と自ら話す親子が多い。思春期以降、20代どころか、30代になっても、である。ほんとうに対等な「仲良し」であれば、なんの問題もないが、「仲良し」のつもり、「仲良し」のふりをしている例が結構ある。本人たち自身は「仲良し」と思っているが、他の人からみると、「仲良し」でない場合が結構ある。

そういう場合、よくいう思春期の「反抗期」は経験したことがない、というし、それ以降も「反抗」したことがない、という。その意味では、子どもは親から自立していない。それだけでない。親が子どもから自立していないのだ。今や、大きな問題は、親が子どもから自立できない例の多さといっているいかもかもしれない。子どもが自立しようとすれば、追いかけてでも自立を阻止し、自分の囲いのなかに閉じ込めようとする。

その際、世代の価値判断・好みの差などは無視して、親の価値判断・好みに子どもを従属させようとする。外・第三者からみれば、その異常さはたやすくわかるが、本人たちはまったく気づかない。わかりやすくいうと、子どもは親の「着せ替え人形」になっている。服装や化粧が世代が違えば異なるのに、そこまで親の世代の好みを強制しているのだ。

こういうケースは、いろいろとあるので、みんないっしょくたにはできない。ここでは、今のべたように、親の方が子どもの方を<呑みこんで>いて、親のいう通りに子どもが振る舞うケースを例にとって述べよう。子どもが物事を判断する際に、はじめに親の方が判断していて、親の判断通りに子どもが振る舞うことが習慣化している例である。

この場合、子どもの方に多少の異論があっても、「いいえ」とはいえない状態が長くつづいてしまい、結果的に親のいう通りになっているのだ。親は我が子のことを「いい子」だと思うし、子どもの方は、「親のいう通りにすることがいいことだ」と思い込んでいる。

たいていの場合、片方の親と子どもとの関係で、そうなっており、もう一方の親は、置いておかれる。それどころか、その親子ペアからもう一方の親は「攻撃排除」対象にさえなる。両親の関係が弱い時、ないしは一方通行的な時には、こうした関係が生まれ易い。それで、子どもの方は片方の親が正しくて、もう一方の親はどうしようもないという「一体化した親」の方の考えに取り込まれていく。その結果、片方の親はますます孤立していく。その結果、いろいろなものごとを多様な目で見る出発点としてあるはずの三者関係が成立せず、親子二人の関係が二人の関係だけで閉鎖的に「発展していく」。

結果的に、子どもは片方の親のことを素直にきくが、あたかもペットのようになってしまう。子どもが親のいうことに異議を唱えようものなら、叱りつけられ、封じこめられる。こうしたことを、「共依存」ということで説明することが、1990年代で広く行われたが、その例でもある。

そして、こうしたケースが沖縄でもとても多くなったことに最近気づいた。それは、「教育家族」が一般化してきたことともかわりがある。沖縄では、「教育家族」の先駆けは、1960年代からちらほらあるが、一般的になったのは、1980年代のことだろう。「子ども」のため、「子どもの教育」のことを中心に考えて、家族がまわる構図だ。そして、他の家族との関係では競争的にさえなる。受験体制の一般化はこうしたことを促進する。

こうした「教育家族」的な考え方が「常識」になるにつれ、こうした親子の過剰依存状態も広がってきたので

ある。

こうした事態からどうやって卒業するか、そのことについては、またの機会に述べることにしよう。

2009年2月3日

過剰依存の「親子仲良し」状態からの卒業のために

2月1日の記事に書いたことの続き。

相互の過剰依存状況が生まれる一つの理由は、当の親子二人の世界に、他の人たちが入り込む余地が少なく、世界が閉じがちになっているからだ。もう一方の親の存在が薄いのもそうだ。近隣・親戚関係も薄くなる。「教育家族」の教育熱心さは、多様な人々との交流協力で行うというよりも、他とは競争関係に入り、閉じたなかで進みがちだ。こうしたことは、都市地区ではたやすく起きる、というよりもむしろ「普通」にさえなっているが、都市以外のところでも、広がってきている。

だから、この状態からの「卒業」のためには、自分たちだけで閉じこもっている世界を広げることだ。第三者が話を聴くだけでも大きな出発だ。そして、感想を少し聴くだけでいい。おじさんおばさんにその役割をとってもらうのも一案だ。いとこなどもいい。親の友人もいい。近所の人でもいい。カウンセラーなどの専門家でもいい。

できれば、多様な人々と交流したい。保育園・子ども会・PTA・地域行事などの機会を生かしたい。商品で買えるような機会は避けたい。親子合宿のような企画もいいと思う。私は、自分の子どもが小学生くらいのころ、職場の家族の合同旅行とか、我が家にクラスメイトのお泊まり会とかをしたこともある。確か担任も泊まったか、部分参加した記憶だ。

当の親子二人のなかにトラブルめいたことが起きたときはどうすればいいか。このトラブルの隠れた原因が、親子関係の密着にあるのだから、トラブルはそこを変えなくてはなかなか解決しない。その意味では、親子各々が、他の人たちとのつきあいを広げることだ。これまで、二人にとって、50～80%を占めていた二人だけの人間関係の比率を、20～30%以下に引き下げることだ。

思い切って、別のところに住むのは重要な解決策だ。それは難しいかもしれないというなら、「距離」を置く関係をできるだけ設定したい。

ところで、実は、この問題は、ストーカーの問題と似ている。「自分が〇〇を愛しているだけでなく、〇〇も自分を愛している」という思い込みのなかで行動してしまう。その人のもつ「寂しさ」がそれを促進してしまうのだ。「寂しさ」なのに、「強がり」で、相手を「支配」しようとしてしまうこともよくある。「思い込み」は一人だと、かつてに「発展」してしまう。そこを越えられるようにしていく必要がある。

ストーカーにあった場合、その人が、そのストーカーと「闘う」のは難しい。ともかく「離れる」ことであり、まずは、それをまわりが助けるのがセーフティネットの一つだ。

2009年5月21日

「母子（父子）べったり関係の卒業」という難しい課題

中内敏夫『生活訓練論第一歩』（日本標準2008年）には注目したい次のような記述がある。

「第二次大戦後、日本の核家族は」、「イエもしくはムラ共同体の主宰する大人・子ども関係」「に代わって現れた夫婦家族なのだが」、「この夫婦家族のなかでの親子関係」は、「現代日本の場合『母子中心』型ともいうべきものである」

そして『教育ママ』の登場（もしくは『教育ママ』のかたちをとった父親の登場と、古典的な父親像の退場）というかたちが進む。そして今、「核家族の解体・母（または父）子家庭の姿が」見えるようになってきている。

P18

鋭い指摘だ。私たちの周りには、事実上の母子・父子家庭がなんと多いのだろう。20代・30代になっても、母子・父子べったりの例が余りにも多い。いわゆる反抗期などはいまや稀少価値といえるかもしれない。結婚が遅い、結婚しないことにもこのことが反映しているかもしれない。

たとえば

- ・経済的に可能なのに、18歳、20歳を過ぎても、子どもと別居しない。
- ・18歳を過ぎても、9時を門限にしている。
- ・バス路線などがあるのに、親が子どもの送迎を10代後半までしている
- ・親のことが心配で、結婚に踏み切れない
- ・子どもが20代になっても、弁当を親が作っている
- ・配偶者との会話より親子の会話が数倍多い。
- ・親(祖父母)を頼りにして、子育てをする
- ・大学・専門学校の学費を、若者本人ではなく、親が直接払う。
- ・30歳近くになっても、親の意見を聞き、親の指示に従う。親はそれを「内心」喜んでいる。
- ・結婚した夫が義母と一体化し、義母から口うるさくいわれ、夫は義母のいうことを追認するだけ。
- ・子どもが巣立って夫婦だけになって、二人だけではすることがない。

こうしたことがごく普通に見られ、当たり前とさえおもわれている。欧米諸国とは対照的であることが多い。そして、こうした例の場合、親の夫婦間関係が薄いことが多い。核家族といわれるが、夫婦間で夫婦関係がどれだけ追求発展させられてきたのだろうか。そしてまた、親が個人としてどれだけ自立しているのだろうか。だが、社会的にも成功を収めて自信を持っている親にこうした例が多い。

さらにまた、自分とは異なるもの、ことが出てきた時、どちらかがどちらかに従うという関係ばかりになってしまうことが多い。競争・勝負にこだわりがちだ。対等・平等にやるのが下手だ。夫婦は、異なるものなのだ。だから、相互に工夫して、新たなものを築きあうことが大切だ。その苦労を経ないから、子どもを自分の思う通りにしようとしてしまうのではないか。

こうしたことは、私が20年間言い続けてきた異質協同ということだ。私自身も格闘してきた。異質協同で夫婦間を少しでもやれそうになってきたのは結婚後12年もたっていた。そして安定的にやれるように感じだした

のは最近のことだ。親子関係では、苦々しい歴史を積み重ねてきた。だからこそ、わが子の自立と、距離を置くことに気をくばってきた。

「母子（父子）べったり関係の卒業」というのは、このように大変難しい課題だ。しかし、避けられない課題だ。それを避けて、子どものせい、親のせい、配偶者のせいになっている人がなんと多いことか。

2009年7月28日

自信がある強く立派な親が引き起こしやすい子どもの不幸

難題を抱える子ども・若者に関わることもある。

その際に、親との関係が難題の「もと」になっていることが結構ある。親が立派過ぎ、加えて、親と対等に気楽な関係を作りにくい時に、難題が表向きになり（事件化することもある）、余計にややこしくなることはしばしばだ。そして、表向きになった場合に、その親子ともども、さらに、まわりも、「立派な親なのに、どうして、あんな子どもになってしまったの」と見てしまう。そうすると、事態はよくなりず、長期化する。

そうした親は結構多い。すごい努力によって、社会的に成功を収めた親、まじめにコツコツと積み重ねた親にも多い。よく「子どもは親の背中を見て育つ」というが、この場合は、逆になってしまう。

そうした親は自分に強い自信をもち、親を模範にし、親の指し示すようにすれば、子どもも立派にやっていると思い込んでいる。そうしたありよう自体が難題の原因をつくりだしていることに気づかない。

そうした親のありよう自体が、実は、子どもを「奴隷」化し、子どもを圧迫し、子どもの自立を押しとどめるのだ。そうしたケースでは、残念ながら、親自身が気づくには時間がかかる。一生気づかないことさえあるかもしれない。子どものほうは、こうした親との関係から抜け出るために、別の強い人のもとに行くことがある。その逆に、弱い人のところへ行くこともある。そして、依然として、「強い—弱い」というとらえ方から抜けきらずに、配偶者、さらには、自分の子どもとの関係で同じことをしてしまいやすい。

こうした例の打開はなかなか難しいが、親子の関係に、継続的に「距離」をとれるようにするのが一つのアプローチだ。その際、「継続的」が重要だ。短期間では、再現しやすいからだ。そして、こういう「強い—弱い」とか、上下関係に疎い人々との関係のなかで、じっくりと別の新たな関係を学習し、身につけていくことだ。ともかく、時間がかかることを覚悟して、開き直すことだ。そして、どっちが正しくて、どっちが正しくない、という二分法的発想へのこだわりからゆっくり卒業することも大切だろう。

2010年7月7日

親が、大学生である子どもの「生活のお膳立て」をするのは心配だ

大学1年生は何かと新鮮だ。だが、新鮮さのありようには、時代変化を感じる。

その焦点は、1年生が、高校教育から大学教育への激変にどう対応するかにある。激変には、地域上の移動がまずある。自宅外学生は、特に著しい。親からの分離をとまなう場合には、寂しさと「自由さ」が共存することもある。経済的な独立が一步進む、という変化もある。親の支援が大半を占めても、自分なりの計算で、支出をコントロールしなくてならない。

その他いろいろと、生活上の変化は著しい「はずだ」。「はずだ」と書いたのは、著しくない例が年々増加しているからだ。この時期、親子分離を中心に、親子関係の変化が著しく進む「はずだ」。またもや「はずだ」というのは、親子分離に抵抗し、分離を進めない事例が増えているからだ。

経済的には可能なのに、子どもが自宅外学生になることを押しとどめる例が増えている。「子どもがしっかりしていないから」という口実をつけるが、実は親が子どもから自立できない、自立したくないのだ。そういうケースは30年前にも出会ったことがあるが、今では珍しい例ではない。

親から「自宅から通える大学にきなさい」と言われて、子どもが反発する例は減少しており、親子の意見が一致してしまう。「では、いつ独立するの？」と尋ねると、「いずれ」という答えである。そうした事例では、20代後半まで、さらには30代以降までも、親子分離ができないことになってしまいかねない。

こんなこともある。大学生になっても、親に弁当を作ってもらう例が増加している。「いつまで、子どもをしているの」と言いたくなるが、少なくとも大学生になったら、自分の弁当は自分で作ってみたら、と言いたい。あるいは、少なくとも交代制にしたら、と思う。弁当持参の家族が複数いたら、交代制は最低条件ではないか、と言いたい。だが、「毎日、弁当を作ってくれる親に感謝しています」と語ったり書いたりする学生が結構いるのだ。

なかには、通学の送迎までも、高校時代同様、親が行う例が登場してくるかもしれない。もしかすると、もうあるのかもしれない。大学で遅くなる時、親が迎えにくる例を、すでに1980年代半ばに経験して、驚いたことがある。

こうしたことは、いってみれば、子ども時代と同様の、「生活のお膳立て」を継続しており、生活上の成人化への移行を延長させているということだ。子どもの自立への教育を放棄しているのだ。それを、すでに1970年代から言われている「友だちのような親子関係」という美名で、覆い隠してはいないだろうか。検討してみる必要はないだろうか。

似たことが、学習面でもある。高校時代までと同様の、「学習のお膳立て」を大学に求めているのだ。

2011年10月9日

親子関係の再編・創造 生活指導学会での論議

私が参加した「困難な課題を抱える子ども・若者への関わりと保護者支援」分科会では、教育、看護、矯正教育からの三つの問題提起があったが、三つが響き合うというか、よくからみあう提起であった。

30年前の大会創設時より、このように異なる分野からの提起をもとにした討論を企画し続けてきたが、当初、分野が異なる世界との出会いが驚き・とまどいをともない、討論を深めるための「交通整理」が求められたが、今では自然な出会いとなり、すぐに討論テーマに入っていけるようになっている。

討論で気付いたいくつかを書き並べよう。

1) こうしたテーマでは生じがちな、「親の責任を問う」という方向性ではなく、親の自尊心を高める方向で実践報告も研究討論も進んだことが大きな特徴であった。

2) 親子・家族、それに準ずる諸関係について、「関係の再編」という色彩よりも「関係の創造」という色彩が少しずつ強まりつつある、ということである。たとえば親子と言うのは、二者関係であるが、それだけにこだわって問題を見ると、閉鎖的傾向を帯び、「強い親—弱い子ども」の関係組み換えに焦点化し、問題解決の方向性が見出しにくいことがよくある。その際に、第三者が入り新たな関係が作られることで、従来の二者関係自体も、新たな関係を作り出す、ということである。

3) 上のことを別の角度から述べよう。問題解決において、個人の力を高めるというよりも、新たな関係を創造することで力を高めるという方向を追求するということである。

それは、社会の全体的傾向として、「個人社会化」が強まる中で、「自己責任」「孤立化」が進行しているが、それとは対照的な方向を追求することである。無論、それは旧に復するというのではなく、関係の新たな創造なのである。家族についていえば、家族の「新しいかたち」を創造していく課題が、どの家族にも存在しているということである。そうしたこととして、「家族の多様化」をとらえたい。

2012年2月21日

若者の親との同居・別居

前出の宮本みち子編著のなかの「7 若者期の光景」に、こんな記述がある。

「親との同居率が高まった背景には、親世代と子ども世代の所得格差が拡大したという事情もある。(中略) 親子世代間に大きな所得格差が生じたことから、親から子へという金銭の流れが、子どもの成長した後にも続くという現象が生まれた。その後、2000年代に入ると、若年者の所得は一層低下し、親元から独立できない若者が増加した。そのうえ、親の経済状態も悪化し、将来に不安を抱える家庭が広く見られるようになった。」P131

「日本のように未婚者と親とが高率で同居する慣行は、西欧諸国では見られない現象である。しかし、近年、同居の理由に変化が見られる。非正規雇用の増加や賃金の低下を背景に、経済的理由から親の家を出られない者が増加し、同居者は別居者より非正規雇用者や無業者が多い。」P137

「親との同居は、職業上の安定が得られ、自活可能な段階に達するまでの生活保障の場になっているのである。」P139

1990年代から話題になってきた問題だ。だが、数十年以上の長いスパンで考えると、大人になった子どもが親から独立し、別居するということがモデル化されたのは、そんなに古い時代ではない。戦後の高度経済成長以降のことだろう。

だから、考えようによっては、以前へと回帰したと言えなくもない。親からの独立を実現しえた経済的条件が持てない場合、親との同居は増えるだろう。このあたりは、今後どのように変わっていくだろうか。

また、1960年代以降、住宅が核家族向けに作られてきたので、子どもが家にいるスペースはなくなってきたといえるかもしれないが、少子化が逆に家にとどめさせるのかもしれない。

もう一つの問題は、若者の人間関係の縮小とからんで、親子関係が過剰に緊密化する傾向を生んでいるかどうか、という問題である。このあたりは鶏と卵の関係かもしれない。

いずれにしても、新しいのか古いのかは別にして、ここ数十年間にはなかった家族のかたちの増加が広がりそうである。どう分析し、どういう将来予想をもったらいいのだろうか。

22. 異世代間

2005年7月10日

学生とのズレから、世代間協同へ、さらに人生後半期の生き方創造へ

授業をはじめ、学生たちとかかわりあう際、私はどれだけ学生たちにかみあっているのか、不安にかられるときがしばしばある。学生の反応が読めないともいえる。しかし、この不安は考えはじめたら際限がない。

むしろ開き直って、むしろかみあわないほうが普通だし「正常」だと考えたほうが、気が楽である。年齢も文化も異なるし、共通するのは〇〇という科目を担当している教師と受講している学生というだけであるからである。

学生たちとカラオケに行った際にも、それを感じる。曲目での違いははなはだしく、ほとんど了解不能である。時々、気づかいのある学生が、私にもわかるだろうと、気をまわしてくれるのだが、それも「申し訳ない。わからない」ということがしばしばである。カラオケになじみの薄かった12～13年前だと、「こんな文化にはついていけない」と腹立たしささえ覚えた。でも、近年では、この世代はこうした文化を楽しんでいるのだ、と発見することがあり、そんなに長時間ではないが、つきあえるようになった。先日は「腹の底から声を出す」というかれらの歌いっぷりに感心したりした。

さて、授業にもどそう。15～20年以上前には、私は自分のペースを強力に押し出して、学生をそれに乗らせて動かしていく、というアプローチをしていたが、その折は「かみあっている」つもりであった。実際、受講生の何割かはかみあっていただろう。その学生のノリに酔っていたこともある。「感動」という表現そのものであった。

だが、そのころは学生のなかで私に対する好き嫌いははっきりしていた。だから、当初から私を好む学生たちが、いくつかのクラス・科目のなかから選択して私の授業を受講してきた。しかし、その当時でも時々どうして私の「ルール」にかかわってくるのか、私には理解しにくい学生もいた。逆に、当然私の「ルール」にのりやすいと目する学生が、のってこないこともあった。

ちなみに、教職志望の強い学生たちは、教師に「あわせる」姿勢が強力である。そのため、自分を出すことを抑えることを習慣化する学生もいる。教職関連科目を担当する教師は、その錯覚、というか落とし穴というか、それに迷い込みやすい。また、教職学生が教師になったときに、相手の子どもにそうした姿勢を無意識に要求するというクセがしやすい。これらはいずれも権威主義なのだが、その自覚が弱いのも特徴だ。

15年前中京大学に赴任して、体育系学生を主として教えることになったときに、私にとって事態は大きく変わった。体育系学生は「教師である私にあわせてこない」のである。そこから新たな試行錯誤がはじまったことは、いろいろなところで書いたので略そう。そしてまた、その7～8年後、中京大学名古屋校舎の文系学生たちを相手に教職以外の科目を担当したおりに、さらに新たな試行錯誤をすることになった。

ところで、私が15～20年前にとっていた「俺についてこい」スタイルは、「自分たちのことは自分たちで決めて自分たちで実行する自治をおしすすめよう」スタイルと並行してすすめていた。最初は「俺についてこい」だが、いずれは「自分たちで」に移行するのだ、という発想である。だが、そこにはダブルバインド性がつきまどっている。そのことに当時は気づいていなかった。

ついでいうと、「自治を指導する」ということは、ダブルバインド的側面をもちやすいのだが、そのことに実践家たちは意外と気づいていない。私自身も最近までそうであった。「自治をおしすすめるから、自分は民主主義者だ」と自任していた。だから、学生たちは喜んで「ついて」くるはずだ、と「信仰」していたのである。このことは、あらためて本格的に論じる必要がある重大な問題である。機会をみて論じることにしよう。

さて、いくつかの試行錯誤をへて、私の「ルール」にのせるということではなく、相手の学生たちの「ルール」の存在を認め、私の「ルール」と交差することを追求する、という感覚を重視しはじめてきた。しかし、交差しているかどうかの不安は、今でも強い。その緊張感が、新学期の授業開始ころにつきまとい、それがまた楽しみである。どんな新たな出会いがどんな形であるのだろうか、と。それは異質共生、ないしは異質発見の感覚で対応するというものである。

これを言いかえると、世代間交流であり、できれば世代間協同まですすめたいものである。私にとって授業がなぜ楽しいのか、それは、何かを教えるからというよりも、世代が異なる人々との共生・交流・協同のなかで、自分にないものをたくさん発見できるからである。無論、教師としての役目を放棄するわけではない。学生たちは、大学の授業科目といった世界で、自分を押し出して表現することにまったく慣れていない。そしてそういう場で協同作業することにまったく慣れていない。その不慣れ状態を越えられるように、かれらの表現・協同活動をコーディネートし、そこで表現・協同したことに私なりにかかわっていく。そこに私の役目がある。

だから授業は世代間協同活動でもある。そしてそのなかで、学生たちから、というよりも、学生たちとの協同作業のなかから、多くのことを発見し、人生後半期にある自分自身の生き方創造にもつながってくる。

しかし、人生後半期にある多くの教師たちは、自分の世代のもつものをなんとかにして若い世代に教え込もうとして悪戦苦闘している。そこには、自分の世代のもの=良いもの・進んだもの、若い世代のもの=未熟で遅れており、多分に誤りを含んでいるもの、というとらえ方が存在しやすい。生き方・人生ということであろうと、後半期にある人々は、すでに一定の「実績」があるだけに、今日のような転換期的状況で新たな創造に向かうことにとっても困難が伴う。旧来の権威的なものにすがると、あるいはそこに未来が見出せず困惑する傾向を帯びやすい。その点、若い世代は「実績」がないだけに、創造的な姿勢をとったおりには、「身軽に」ハイピッチで人生創造を展開していく。

いずれにしても、生き方・人生創造として、若い世代と後半期の人々との出会いをとらえると興味深い。

2011年12月17日

「今時の若いものは・・・」？ 世代間時代間のずれと協同

昔から、「今時の若いものは・・・」という言い方で若者をなじり、また、「今時、こんな軽薄なものが・・・」と言って、現在の『世の中の風潮』をなじる言動は存在してきた。今日でも、そういう言動が広く見られる。とくに、自らの奮闘によって実績をもつ人がそうなりがちだ。そんな言動の例をあげよう。

「私たちの奮闘努力によって経済成長が達成され、今日の繁栄が築かれてきた。しかし、今は困難のなかにある。しかし、それは一時的なものであり、さらなる奮闘努力によって回復し、さらなる成長繁栄の軌道に戻ることができるはずだ。それに応えるべく努力をしない風潮があるが、それは許されないことで克服されるべきだ。」

「教師や親の奮闘によって、世界一ともいうべき日本の学力の高さが達成されてきた。しかし、その位置から落ちてきたのは、さらなる奮闘が不足しているというべきではないか」

こうした発想は、意外にも、それまでの時代を批判的にとらえ、時代のありようを変える営みのなかにも存在する。それらは、それまでの時代の主流の枠組みと対抗する枠組みを提示し、その推進をはかる運動としての枠組みを形成していた。見落としてならないのは、その対抗的枠組みも、それまでの時代の枠組みのかなりの部分を含みこんでいることだ。

そうした対抗的な動きに関わってきた人にも、新たな動向に対して批判的な動きをすることもあり、時に旧来の時代枠組みを無自覚に忍び込ませることがある。

身近な例をあげよう。

旧来の枠組みにのなかで批判的な人に、今日のIT技術を駆使した動向に批判的で、それらの技術を使用することに及び腰、ないしは不使用を「貫く」ことを見受ける。そして、紙媒体、手書き媒体など旧来の媒体にこだわることを重視する人がいる。だが、考えてみれば、そうした紙媒体にしろ、登場した時代には、先進的なもので、それ以前の媒体を使用する人から批判を浴びてきたのだ。

問題の焦点は、新たな媒体を使うかどうかにあるのではなく、新たな媒体をどのように使うかにあるのだ。

今日は、流動的だといわれるほど変化の激しい時代だ。だから、この変化に対応する際、一人一人が個人として取り組むのでは、無理が生じやすい。紙文化を中心に生きてきた人は、自分の体のベースに紙文化がしっかり根付いており、IT文化に対応するのに困難を感じるのは当たり前だ。

そうした時代変化に対応するには、時代間世代間の協同が不可欠だ。IT文化を使用する時は、IT文化に強い若い世代に助けてもらうのだ。そして、助けてもらうことを一方向にとどめないで、自分も持っているもので若い世代を助けることもしたい。若い世代とベテラン世代とのずれを協同へと変えていくのだ。そうした協同に弱い人、弱い組織は、世代間断絶に陥り、孤立へと進む。そして、「今時の若いものは・・・」といったような他世代へのグチが出てしまう。

23. 教育費

2007年7月10日

授業料など納入費用

この記事は、進学する大学選びの際の知恵を連載した際に書いたものだ。

授業料・入学金などは、事前にわかるが、実際に入学してみると、その他の思わぬ経費がかかってしまったという話をよく聴く。施設充実費、教科書代、部活・サークル費用などがある。

部活・サークル費用・教科書代などは別にして、大学に直接納入する額にしぼっていうと、授業料だけを見るのではなく、4年間に納入すべき総額（4年間学費という）に注目したい。

私立大学なら、400万円以上が普通である。400万円以下は珍しいくらいになってきた。しかし、安いからといって手抜きの教育をしているわけではない。むしろ、そうした大学のなかには、平均以上に熱心な教育をしている地方大学が結構ある。逆に高いからといって、丁寧な教育をしているとは限らない。デラックスな建物をつくり、見栄えで学生集めをする大学も結構ある。

私立大学でいうと、400～450万円は文系の話で、自然系となるとずっと高い。医学系では目の玉がとびでるほどの額であることは珍しくない。体育系や芸術系は両者の中間となる。国公立大学でも、近年は私立大学にだんだん近づいてきている。

若者の自立を考えると、自宅からでて、自分で生活するほうが、大学生らしく成長する機会が広がることは確かであろう。しかし、生活費が結構かかることは覚悟しなくてはならない。大都市では年間150～200万円の範囲となってしまう。

それを親の支援だけで賄えるのは、年収1000万円以上世帯の場合であろう。そのため、もう数は少ないが、沖縄の大学生のように、自分で稼いだ資金で大学生活を送るというのは、大都市大学では不可能な状況にある。アルバイトで補うというが、限界がある。自費で大学に入るといふ学生は絶賛に値する。しかし、そうした労苦をへながら、大学生活をおくこと自体が、人生の授業料支払いになるかもしれない。

親が仕送りする場合に、授業料は親が直接大学に納入し、ほかに月々の生活費を送金し、さらに必要があれば継ぎ足す、という仕送りが結構多い。それでは、子どもは親依存から抜け出しにくい。

ある先輩から習って、私自身の場合も採用したおすすめの方法がある。それは、授業料も生活費も一切を含めて、年に一度まとまって送金するのである。追加は一切しない。本土に出すのであれば、たとえば200万円としよう。それを子どもがいろいろと計算して、やりくりする。子どもは高校時代までに、そうした額のお金を管理したことがないので、驚き喜ぶ。親に敬意を表することもあろう。しかし、やっていくうちに、それでは十分な経費といえないことに気づきはじめる。そして、必要なアルバイトをし、遊興費に注ぎ込むという失敗をしなくなる。

こんな知恵を、いろいろな親が情報交換していくといいだろう。

2009年12月10日

教育費と家計

子どもの貧困白書編集委員会編「子どもの貧困白書」(明石書店 2009 年)は、重要な事実を突き付けている。次のことは、多くの人を持っている事情だが、意外に知られていない。それだからこそ、「子どもの教育のために」ということで、個人的に、「自己責任」論をもって奮闘する親が多い。

・「国民金融公庫の教育ローンを借用している世帯で、小学生以上の子ども全員にかかる在学費用をみますと、年収200～400万円の層では実に家計の55.6% (400～600万円層で33.8%、600万円以上層では25.9%)が教育に関わる費用に占められています。」P39

・「18歳未満の子どものいる世帯の収入はここ11年間下がり続け、その平均値は1996年から2007年までで90万2000円の減となっている。(中略)大きく増えたのは300～350万円を中心に200～450万円未満の収入階層である。」P215

・「阿倍彩氏は貧困を「相対的剥奪」という視点でとらえた場合、境目となるのは年収400～500万円であろう、と推測」P217

・「正規雇用置き換えられて急増した派遣等の非正規は、フルタイムの比率が高くその賃金は家計収入の中心であることが多い。「主婦パート」の従来のイメージとことなり、こうした「フルタイム・自立生活型」の非正規が急増して正規雇用置き換わったのである。ちなみに、2008年秋からの「非正規切り」は、主としてこれらのフルタイム・自立生活型非正規雇用を対象としたものであった。」P218

この境目の400～500万円ということは、沖縄では半数、ないしは半数以上が該当する。個々の家族の問題をはるかに超えて、沖縄全体の構造的な問題なのであり、それを打開する「県民運動」的なものさえ必要になる。そして、それは沖縄に限定されずに、多くの地域が該当していくだろう。

その際、次の指摘にも注目したい。

・「新自由主義の言説は、社会の成員を分断(私事化)し、特定の集団を排除(他者化)し、現実の様相を隠蔽(換算化)する言語なのだと言っている。」P62

・「「子どもの貧困」という問題は、単にそれが子どもの「自己責任」ではないという意味で「自己責任論」を免れる問題であるばかりではなく、子どもの養育者に責任を還元したところで問題が改善されるわけではないという意味で、「自己責任論」そのものを根底的に問い返す意味をもった問題なのだと言っている。」P63

しかし、こうした問題に対応すべき政策は、逆向きになっている。

・「日本が、OECD諸国の中で、唯一、再分配後の貧困率が再分配前の貧困率を上まわっている国である」「政府の「再分配」によって、子どもの貧困率は悪化」P26

2009年12月11日

若者の経済的困難と高校

1970年代から1980年代にかけて、「一億総中流」という言葉がはやったが、当時から、実態とはかけ離れていた。しかし、経済的な豊かさをエンジョイし、「一億総中流」を信じる人が多くいたことも確かだ。それを基盤にして、「標準的な生き方」＝「レール型」人生を歩まなくてはならない、と考える人が多かった。親も学校も、多くがその方向をおしすすめてきた。現在も、50代以上の人には、そのことを無意識にもって発言する人は多い。そして、現在の40代、30代にしても、それに囚われている人は多い。

だが、「一億総中流」にとってかわって、「格差社会」的イメージが2000年以降広がっていく。それは、「一億総中流」を支えた企業社会の繁栄が、90年代以降、非正規雇用を激増させたことに象徴されるように、「下層」を犠牲にすることで、「継続」させられてきたからだ。

そして、その「下層」がどんどんふくらませられ、経済的な将来展望を築けない若者を拡大させた。すでに80年代にあっても数%以上の若者がそうであったが、いまや半数前後の若者がそうした事態のなかに組み込まれている。そのなかで、日々の生活さえ困難である若者たちが大量に出現している。

そうした困難にある若者を、一時的にしる支えられる親の層が、50代以上にはまだ一定程度存在するが、現在の40代半ば以下には、そうした層はやせ衰えている。「レール型標準」では当然とされる大学・専門学校進学を可能にする資力のある親は激減し、高校進学さえ経済的に支えられない親が激増しているのだ。

そうしたことの中で、次のような事態が出てきたことを前回の書籍が示している。

・「2009年3月27日、大阪府内で、公立の定時制高校の志願者が急増し、167人という前代未聞の大量の不合格者が出た。(中略)教育のセーフティネットである定時制が、狭き門になっているというゆゆしき事態が各地で起きている。」P106

・「2008年の中学新卒者数は1996年と比較すると約35万人減少しているにもかかわらず、定時制高校への中学校新卒志願者数は96年より増え続けている。そのため定時制への新卒志願率2.39%となり」P109

・「定時制を卒業して15年目の同窓会を開いてみたら、多くの卒業生が病に伏していた、多くの卒業生が生活保護を受けていた。」P111

そうした経済的困難に直面する若者にとって、経済的困難を補うものとして人間関係があるが、それさえ危うい状況にある。

・現場の高校教員からは中退者の多い高校は、「シェルター（避難所）的存在」という指摘があった。家庭が崩壊し、地域とのつながりもない中、友だちに会える学校に来る。だからこそ友人関係がこじれたら中退する。」P104

2009年12月12日

大学進学と経済力

私は10年前盛んに行われた大学サバイバル論議のなかで、大学進学希望者数が入学定員数を下回るのは、少子化で18歳人口が減るというだけでなく、子どもを大学進学させられる親の経済力低下問題でもあると予測し、問題を投げかけてきた。それは、当時の30代の経済力を見てのことだった、彼らの子どもは、いまや18歳になりつつあるが、まさにそうした状況を示しつつある。同じく前回の書籍からである。

・「私立大学新入生の家計負担調査2008年」

「仕送り額から家賃額を引いた生活費は3万6000円で、1996年の6万8000円からほぼ半減し、月額1200円となっている。」P256

・「全国大学生協連調査」

「仕送りゼロの下宿大学生が8.3%、1か月の食費は30年間で最低の2万4430円となった」P256

そして、10年前に30代であった1960~70年代生まれの親の子どもたちについて、次のような指摘がなされている。

・「子どもたちの半数近くが今、『高校は卒業するけれども、大学・短大には進学しようとは思わない』という考えをもっているという現実がある。日本の高等教育進学率は55.3%（2008年度）と世界的に見ても有数の高水準になっているが、この水準は平成の少子化世代の大学進学意欲が高まらないため、もはや拡大することはないと予測されている。」P48

下がっていく可能性さえ強いと私は思う。その理由は、親の経済力低下の中で、奨学金に頼り、将来の返済を子ども自身が行う必要が高まってきているからでもある。しかし、その奨学金も次のような状況にある。

・「日本においては、高等教育の学費が高いにもかかわらず、奨学金を受ける学生の割合が低い、というきわめて特殊な国である」

「奨学金の内訳をみると、日本においてはほとんどが「学生ローン」ですが、他国では無償の供与が多い割合となっています。」P29

そして、現に奨学金返済に困る卒業生が激増している。

その大学進学は、世代の中の分断線を作るという、次のような指摘がある。

・「日本のように、大卒か非大卒かという分断線が社会の中央部分を切り分けている社会は、韓国やカナダのほかにはないという事実である。むしろ学歴の分布が上・中・下の3類型で構成される国が一般的である。」

「これらの社会にあっては中卒相当（義務教育終了）という学歴は必ずしもごく少数というわけではなく、下層には位置づけられるけれども何らかの社会的役割を受けもっているのである。これらの国と比較して考えると、日本の中卒層が学歴の上下の序列でも、数の上でもマイノリティに追いやられている状況がいかにも特殊なもので

あるかがわかる。」 P 4 9

カナダは、日本よりはるかに福祉国家的である。その意味で、韓国とならんで日本は、今後深刻な事態が出現しそうだ。

親の経済力低下により、全日制高校への進学が困難になる例については、前回紹介した。そして、大学・専門学校進学困難の事例が、ここ数年、急激に表面化してきている。大学サバイバルは深刻、というよりも現実問題となり、一般化さえしていかだろ。そして、奨学金返済不能の卒業生も激増するであろう。現在の政策が続く限りは、ではあるが。

2012年3月9日

大学進学をめぐる経済的困難と格差

前出の宮本みち子編著のなかの「子どもの教育期の長期化と親負担」という節に、次のような叙述がある。

「日本は国際的に見ても、教育費の私的負担が極めて重い国であるが、日本の年功序列型賃金カーブが、中期の子どもの教育費の膨張に合わせて所得を保障してきたのである。」 P152

「日本の年功序列型賃金カーブ」も含めて、子どもを大学に進学させる経済力のある親の増加が、80年代後半からの大学進学率上昇を生み出したが、それに黄信号がともる。親の経済力の頭打ちないしは低下が、格差拡大という形をとりながら、大学進学率上昇を抑え込み始めることを、私は10年以上前から言い始めたが、おなじことをさらに具体的に著者は述べる。

「経済不況の長期化、雇用の不安定化が続くなかで、親が今後とも重い教育費負担を続けられるだろうか。予想される結果を挙げてみると、次の3つの事態が考えられる。①低所得層の子どもの進学率の低下が進み、格差が拡大する。②学生ローンなどの借金で大学を卒業する者が増加するが、借金返済と大学卒の学歴によって得られる追加所得とのバランスがとれなくなる。③子どもの数を減らして重い教育費負担に対処するため、少子化はますます進行する。」 P153-4

著者が示した三つの事態は、いずれもすでに現実のものとなっているといえよう。それは大学進学率に限らず、非正規雇用増加に象徴されるような「学校→仕事」をめぐる困難・格差という新たな事態も生み出してきている。そのことについても、的確な指摘がなされている。

「子どもの教育が完全には終わっていない年代にある家庭では、子どもの教育費の負担と老後の蓄えをつくるという大きな課題を果たすことは難しくなっている。また、この世代の子どもたちは就職難に直面し、学卒後、ただちに安定した仕事に就けない状況にあるため、親の責任は長期化しているが、それができない家庭やジレンマに悩む家庭が急増している。」 P155

こうして、高齢者や子どもの問題だけでなく、10代末から30代初頭の若者問題が、社会構造の問題としてクローズアップされてきている。

先日、自分なりの信念をもって中卒で働いてきた方が、「ハローワークに行って、高卒以上出ないと、仕事が見つけない」と言われたことがきっかけになって、中卒後10数年を経て高校進学し、さらには大学進学することにした、という話を聞いた。「学歴社会日本」が生きているのだ。と同時に、他方で、大学院生が増加させられているが、オーバードクター問題に象徴的なように、大学院修了者にふさわしい職の不足問題がある。「知識基盤社会」と言われるが、日本ではそれに対応する「学校→仕事」の構図ができていないことを示しているだろう。

100%近い高校進学率、大学進学率急増の1980年代以降、1960年代に確立した、日本の「学校→仕事」

のありようの前提条件は、構造的変化を遂げている。たとえば、かつては、高校普通科→大学→仕事という流れは、エリート養成、ないしはそれに準ずるものだったが、1980年代にはそうではなく、ありふれたものになった。そしてその後、大量の中退者が象徴するように、1960年代型構図の機能不全が表面化してきた。そうしたなかで、雇用側が正規社員限定という形で従来の雇用システムの取り壊しを始めたのは、90年代半ばだった。

すでにこうした事態がありながら、学校→仕事のシステムは、依然として旧来のままにとどまる傾向が根強い。そこから生じる問題が、格差拡大の中で弱者に振り分けられた若者たちに集中している。こうした意味で、学校→仕事の新たなシステムの構築が求められている、とも言えよう。